



磐水先生隨筆目錄

卷之一

留塾漫筆

卷之二

徹菴錄

卷之三

瓊浦紀行

卷之四

寄奇次第上

卷之五

同中

卷之六

同下

卷之七

奥行日記

卷之八

蒐伎能片枝

卷之九

槲蕪雜志

卷之十

澗老漫錄上

卷之十一

同下 八荒錄異



卷之十二

北牘医詁 雜記

西鷗異稱

卷之十三

尋夢齋隨筆

卷之十四

銷夏筆記

霜降月 有暇の記 比丘形医傳 東奥地名私考 金華直金雜記 還命笑記

卷之十五

消遣隨筆

卷之十六

同

卷之十七

珠樹園漫筆

卷之十八

珠樹園日涉

卷之十九

繫翁日涉

卷之二十

同事異言

盤水先生隨筆

○留墾漫筆初編 宣永七年以成

安永中橋仲須磨比浦より漁人の網を左き 金の甲
と引け入る。漁人止まらず 文首勿憲が多矣。
留生、枯死、何物かと尋ねると留生は留生是
が見ゆる。又甲の内は新中納言平知齋と彌介と
阿室在ふ。金振あち山へく是れ承も乃ち國の
太古の歴史也。社友左翁も勝也
帰り山へと社友左翁も勝也
和蘭の解体すや火を肢体皆軟骨なりと軟

骨かる。在す能長す能長むれも精剛骨とかる。
ト而フ若艸の庵宇田川平年多神^{ミタニ}トモ物と東
新ニヒリ軟骨の者無生長すと海鷗與其の
殿兵ハ鰐板の敷カフと蘭池カラカバシ云々^ス
骨脆軟^{クル}トからかうからテ^リトと單の物を嗤^ス
の極^{カツ}トヘニテレ^ン訳の略也^カ

○布被物輕本感^{カク}身^シ虹^{ヒメ}の衣^{アラマサ}增^スト^ス半^ハ
往^ス事^ス伊萬^{イマツ}本^ホ房^{ボウ}及^シ御用^{ヨウヨウ}所^シ虹^{ヒメ}と幡^{ハタ}
之^ノ駕^カ九^クうれ^シの内^シ里^リ一^イ幡^{ハタ}所^シ天^テ方^カ
之^ノ中^シ也^シ灰^{カス}木^キの外^シ所^シ一^イ也^シ云^ク虹^{ヒメ}增^ス
音^ノ松^{マツ}也^シ虹^{ヒメ}増^スト^スハ^シ虹^{ヒメ}増^スト^ス幡^{ハタ}
幡^{ハタ}見^スト^ス見^スト^ス伊萬^{イマツ}本^ホ也^シ衣^{アラマサ}する^ス

○和蘭^{ヨン}ストンヌ^スの禽獸^{ヒンジ}傍^{ハタ}人^{ヒト}裏^{アヒ}の形狀^{ヨウザイ}至^ス胸^{ヒヂ}
卅^{ハチ}丈^メか^クと^シア湖^ヲ者^リ時^ヒト^シ人^{ヒト}裏^{アヒ}之^ノ猩^{ヒン}
^{ヒン}或^シ神^{カミ}杯^{ハチ}二^ニ八^ハ斗^ドの更^カ豔^カ可^リゆ^カ影^{ヒメ}見^スト^ス之^ノ元^スレ^テ
尾^ハ奥^カ成^スト^ス折^ク出^スト^ス之^ノと^シ田^タ理^リ也^シ助^スト^ス之^ノう^シ
圖^ト画^スト^ス之^ノ拿^スセ^ス之^ノと^シ鳩^{トリ}後^ハ先^ス生^ス之^ノ物^{モノ}之^ノ見^スト^ス
七^シ少^シ蘭^{ラン}人^{ヒト}之^ノ人^{ヒト}欺^スト^ス之^ノと^シ有^ス之^ス見^スト^ス

○誠^ハ後^ハ新^ハ活^ハ浦^ハ新^ハ活^ハ之^ノあ^リ浦^ハ人^ハハ
び^ト之^ノ手^ハ山^ハ手^ハ之^ノ折^ク一^イ角^{コトハ}之^ノ敵^ハあ^リ怪^ハ
物^{モノ}活^ハ之^ノ高^ハ山^ハ之^ノク^リ一^イ日^ハ賸^ハ浦^ハ人^ハ迎^ハ之^ス
之^ノ日^ハ月^ハ送^ハ之^ス日^ハ月^ハ送^ハ之^ス之^ノ是^ハ是^ハ志^ス志^ス

うさうんとく 猿人と軽く鉄炮とく オ元とく
打連れ わく見 うり 手猿人只取手をすく
玉うりの師を手を買ふ 仙翁御下に持てく
麒麟の首をいとし見 うり物 うり うり 五段寶
鷲中江都 ル 指示 ル 角斗 ル 先生 ル 頭 ル
口と見作り うり 一寸四分半長さ已
三尺二四分二毫 ル 形狀を熟視する所御水
原と見 うり 持て 本邦より産すると見へた
うる性の物か ル 先生の物 ル

○蘭人谷思東思著ス所禽兽譜ニイシナギー_{印度}レケハニ
ト云者其圖其佛ヲ讀ニ主那ニ所謂聖代未現スル所
ノ鳳鳥ナリヨシ印度ニ產シ印度並雞ト云者ナリ突

茂實再按
鳳鳥ハ赤道之下熱帶之國所產一種
モノナリト云々左ニアラズ聖代ノ德化海外近ラヨジ
南越ヨリ何カ方物ヲ獻ジ崑崙ノ竹ヲ獻シテ笛ヲ
製セテレシテナシ加ク其項海外ノ民鳳凰ヲ獻シヌ
難也ト矣ルトナスニカ故ニ奉儀杯ト云鳥ノ出タルニ奉儀トハ
ヒバ支那イワザル筈ナリ此聖王ノ恩化四方ニ及シテ盡入奉
正帶ノ國不產ノ明儀ノコレヲ獻シタル物ナラン乎ト思ハルナリ又按ニ神
矣

輿ノ上ニツケル鳥ラ此方フト云何レノ由緒ナルカ
知ラズ按スルニ蘭書中ニ鳳鳥又 風鳥 カーネルトアリ
風鳥鳳トハ相違ノ者ナルカ如何ナルエヘカ如此書タ
ルカ詳ナラズ思ニ鳳凰ノ享几ニ从ヒニ凡几ハ佛國
ヨリ来ルモノ故輿ノカレテニモツケルナラシテナゼ

ナレバ其鳥ヲフト云ヘハナリニス按ニ雄ヲ蘭語 haan
雌ヲ haen ト云立那ニテ鳳ヲ雄トシ凰ヲ雌トス鳳華音
アシ鳳華音ワニシハ蘭ノ haan haen 轉セルカト思
ケル、也中川先生鳳鳥ノ佛ヲ翻譯ニ且其說所、以テ
禽獸諸ノ圖ヲ大ニメ如所說文采ヲ彩色シテ楠木雪
後江者ヲ再セシメテ先生ノ著蔵ニアリ形狀甚奇
復観スベキノ文采ナリ贊アリ別ニ翻譯ノ書アリ詳
ナリ以上中川攀卿先生ノ說真ニ奇談ナリ未タ和漢
ノヘノ知ラサル所ナリ鳳鳥ハ聖代ヨリ外也テナル事
ト和漢ノ人數千年来一定シテラキタリニ彼國コ
レヲ產スルト見出シタルモ莫當代昇平ノ大化ナ
吁嗟感歎スベキナ

- 狐と云獸も方面里の廣ウキの國は非まば恒ず禮
世物も狐かし歟よ狐も禮多る。かきり狸も禮
也々車馬 物も曰國とも大神云物多ニユ
伊豆の七管うち裏ハ牛ヒ葦ドリ勿かし拉キシモ
邪魅トモ悉クノ邪祟病あり。山民天狗とは云れ
タエ云前何の獸かトモ勢凡ヒ野狐も恨うむ一
つの邪魅トモ悉くノ何國よりも邪祟病を有する所のみ
ハナリト先生の也抱也ト
- 蘭人モ邦モ東の船宿中ニツのあ焉の子内見
キ西洋の三異ヒシカイスタラビヒ故の肉もこちりの
廣ナリ向の山頂に跨る所大なる金佛モ
古跨毛する向の蘭船通接處の蘭船也

立て渡多ヒカル是女一有了又イタリヤーンシスの内欲
程^シ大き^シ了^クアレ^トは妻^{シテ}長^シ高^シす天教定^シ至^シて何年
は妻性^{シテ}の言^{ハシ}ア^ハレ^トし長^シ高^シす天教定^シ至^シて何年
とやりかルハ死^ムキリ^カア^ハレ^ト豆^シ投^シ極^シ時^モあつ^シ
ト^シみ軽^シの香^シ木^シ縣^{シテ}集^シ夫^ト火^ト火^トか^シ方^シ
の身^ト後^トも死^ムキリ^カア^ハレ^ト反^シの肉^ト自^ト折^シ一^シ身^ト生
毛^シ空^シ蟲^{シテ}生^シ長^シト^シか^シの財^{シテ}の名^ト変^シア^ハレ^ト是女
ニ^シア^ハレ^ト又^シ一^シ里^シ才^ト方^シ作^シ産^シセ^シ天^シ堂^{シテ}爐^{シテ}是女
是^シ其^シ三^シ才^ト蘭^{シテ}人の物^{シテ}作^シセ^シと^シ吉^{シテ}雄^{シテ}の叫^{ハシ}
因^シ人^ト十八^シ才^ト布^{シテ}物^{シテ}作^シセ^シと^シ吉^{シテ}雄^{シテ}の叫^{ハシ}
めつちあわゆ^シ虚^シ遊^シア^ハレ^トと^シ却^シ加^シめ^シと^シ年^{シテ}先^シ
を思^シ少^シ唐^{シテ}人^ト天地^{シテ}の大^シき^シと^シあう^シに^シ即^シる^シ所^シ
此^シキ^シ才^ト物^{シテ}さう^シ一^シ天^シの餉^{シテ}き^シう^シ至^シハ年^{シテ}

若^シき時^{シテ}ア^ハレ^ト極^シ恨^シ愧^シア^ハレ^ト叫^シル^シ牛

車^{シテ}敵^{シテ}方^{シテ}外^シ記^シア^ハレ^ト高^シ一^シ止^シつ^シる^シ可^シ参考^シ

○在^シ者^{シテ}間^シ老^シ半^シ伊^シ多^シ處^シ少^シア^ハレ^トき^シ至^シ一家^{シテ}士^{シテ}の
シ^シぬ^シと^シ向^シア^ハレ^ト忍^シ土^{シテ}五^シ才^トも^シ為^シて^シ由^シ出^シ是^シ才^ト
自^ト筆^シ一^シ毛^{シテ}出^シ火^{シテ}不^シ因^シ席^{シテ}死^シ出^シは^シ可^シる^シ
切^シ手^{シテ}ぬ^シと^シき^シ心^{シテ}斯^シく差^シ急^シ卒^シ勿^シを^シき^シゆ^シ忍^シ其^シ是^シは^シ否^シ全^シ博^シ叶^シと^シ此^シ時代^{シテ}
の人物^{シテ}主^シ徳^{シテ}阿^ハレ^ト佛^{シテ}雛^{シテ}可^シ感^シ嘆^シ也^シ是^シ場^{シテ}
た^シ

○和^シ蘭^{シテ}郁^{シテ}の内^{シテ}大^シ蒙^シ役^{シテ}車^{シテ}元^{シテ}月^{シテ}而^{シテ}才^トの厚^シ
日^シシ^シ毎^シ厚^シ郁^{シテ}人^ト士^トを^シお集^シめ玉^{シテ}翁^{シテ}之^{シテ}徒^シ等^シ

といひ後も多お厚き。士庶人至本角々ヲ代科
と多く歸る是もて学校に監視且輶旣孤獨
と喪が基ともり可了眞民等あと度く自
力は盡すもよりと可也此を至見の胸は度ル
一年月日時を考へハ一ノ学校の元ニまつて
至謹と至しけも因づり人少く至思と至れ
又至学校中は貧乏なる者何處か至思を乳哺
教育へ至つてと可り亦うかしては至多親方灰し
至く異なと可り先きの年月日時の割符と格打
ミ子連毛歸り可り至学校やも醫者聲
一嘸駕壁かの不具足の人多く至く至思ひとと多く

夫もも又夫亦再び轉轉抑て可り也細工物抑と
響うる。と可り至細工の物と工夫事の交易と
彼凡ど業も甚ひ且至國外の民用とかじて産業
とつとむる。而つ國中高の布類も軍物といふ事
専ら如ナシ。而國工事他國より移セリ。又小
島の國園闘競といふ事も至る。而つと可り
○虹といひアリ。アリ無形と象く地の形もまろく。而
つアリ体。三角のみ筋を引いたる。且の最端
うれ多の赤色。多紫紫色。序色。日の紅色映る。先混と
又多紅厚く。可り。相み色。可り。掛み色。魯
布。アリ。並色。可り。互色。多と混。アリ。萨瓦色。

かうてすとて元の色をかくと有難の事ス
（ち）と鼎山先生の御里をひき

○ 驛長良驚時変害 一宋一房是春秋

安永五年春南勢山田ある人ニ村達た唐門市伊
邇多アシテ 橋舟外お縣長の主もヌ加シテキテ市
内は主也アリ有ルハニの義アリテ 東神禮政の
事は任也ルル多ヒ一ツモテ 市旅席内をもしは太
宰府へ左遷の時主テニシテナリトセテノモセ
テ遠祖シテナリトセテモセテモセテモセテモセ
トセテモセテモセテモセテモセテモセテモセテ
モ旅席モーク懶く思召されいつんと傍流の人の

而まくゆいこりうごもまと一キリルルルルル
而耳より通一と仰キつうらむれ一聯を何を
乞毛あひて下へゆひり有シテ見セキテトモ
疫神のゆやせりの事ヤモレタセヒトモヒ
シカシ、當衰いまよその事アリテテテテテテテ
須磨アミタの駒の長ニ稀庄をもととせりなくか
ミキアリテ少か矣、湖月夜アリテテテテテテテ
仰天もの、仰天もの、おこなひテテテテテテテ
一年也モ年増月まゝ人ハ乘歎アキテ稀冬ア
ハ仰天も大さみ子ぶけ内毛子あう一かく
者ハ紀伊山みぢら高良加萬千石銀生アキ

タホリヤア角弓ある嘉義内里と松本押ひ大
金と後うか角弓ある大量の大金が、にまを
（くわきを毛と角と色と叫ぶ）紀伊國角と
ソウカ一代の内百万あつ身代とす。上等ス一代
の肉は百万あつ並源を後うひ多く一束ニキ
通いよく多くの金を費す也。日本ノ男ひ才子
金とあきしちりもくづかうと一日思ひ才子
吉原遊興。草馬道急す。笠漏此の吉原遊興
人を出一泊ニ至る。日程充何をかひまうとを
旅館尋ね。大葉三歩佐賣御主とソガ。第三步
貢茶院。宿一泊モ一日至るもと併せ。彼は
彼色色をくわうの連つてせゆだり。音一十と

河の岸辺の調查くとへさんを主ひたう。多聞の様
子ゆき多門へと日いか（のさゆア便の沈醉布さ
「湯屋筋」筋と云ふ。之ゆゑより山あく。岸辺を承
后くれ。彼の近所の温泉筋。一ツの小石を
う立く。又隣の岸辺に。くかくいが毛ぬいと云々^ア
手筋ひかけられ。そと多聞。あかしゆキカラ。物も岸
加とゆひ。多門。一軒の岸辺。二丁脚。主とおも
指指。セレ。玉。有ぬの花と。うりを。ありと。おも
も。多門を。勿浦江戸。大許刊。うり。あ
どや。又。下のめく。ちぢみ。のけり。と。ま。ほ。
牽引。西番左。番猫。を。番。根。根。根。根。根。
の。根。根。タ。の。思。ひ。骨。ナ。リ。カ。南。根。の。根。と。根。

ラハヌムトホカレシホの直ヌクナツトモニテ
橘丁色ニシテ作ホリテ企テシミタケニテモセテ
ヒサキシバ弟万吉殺死カシメテテテテテテテテ
百萬半切レタ者多喜以モシテテテテテテテテ
是モも嘗ニシテ先代ハシモシナガルハ夫ハ西側
カヤモシテ右又力あめ音ノミ武力毒ヲ内ミト
又紀伊東在深川下松處ニ躰鞠リ而モモアミイ
ナリ西宮道具在珊瑚樹の傍メ武ヲ持虎
伊石トカニルモキシテ指刀セシモ龍調刀セシモ價
伊能知トシヘバ武ツシモ八旗也ミシヒシガモ
通了調ひ加ノ鶴ニシテ弟毛價ハ左庵ナリ
ミ帰れとて更シモトト賜くわづく儀ミは無

ミヤメ波珊瑚樹見事ナリモ瑕アリ先般又
ナリ時、弟、付ギリ一毛二ハ義ヌ入ラギリ、
至る日、落虎の西番と猫と、左ノ死門にて、
又至時、少の事、ハシハシヒトチ、ム根、大ナギシ
ミ帰り、左ニ高、猫、ハシヒ、ナシの事、前此
セハナヌ面あうしミ元クミコロ秋ヌ月ニ、さう
んやヒナキレ、取種本アリトモ要ニキモシカ
ナヒ伊國郡ハチヅク蘭寺の又百里ヒノ一鹿人、
鹿鷹切レ、或駄不思の蓮見は便ヒ多駄家
を如くナキシテ左度ハ酒多シシレハ酒ノ年
主御モハズトナリ、夙起スヘラルハトツハ方宣
ナ控ケ度シトモ空虚くの湯浴ヌテアリ、ノ

一木風呂も卓上から扁柏をひ桶を二升の如くか
うへ湯浴沐くニ階より下りる。それ以後僅かに千葉
市が傳。今萬を立てゝ、ニードラム。もう立てたる方里
の内をも新湯。湯船を作りセリとて而の
御山の如く向る。オーフラムナシモテ。匂ふ所の
やまき。長ト高。實因。は。深川駿河
の裏店。住店せし。多ひ石室尋。は。深川駿河
のヤ袖。ノ。着く。毛毛縫の甚居盤。甚居作と置く
。行。乃事雨物。ノ。筋根。ヒ。アレバ。色
如それ。ノ。至。式林。モ。モ。ニ。階。ト。上。モ。レ
モ。と。雨。の。立。ル。キ。ミ。シ。ヘ。人。二。四。年。因
元の財と見事。内御室は旅。モ。大金の原用

メ。ヨリ。ヨリ。ノ。一。在。ゆ。時。五。持。取。ひ。前。者
ア。ノ。ノ。金。貰。方。あ。と。賜。レ。主。屋。み。万。ル
而。ま。因。ノ。本。屋。三。西。主。キ。ル。レ。並。醫。者。西。安
田。也。も。在。う。も。ノ。初。免。先。も。拂。ノ。そ。く。而。屋
ア。ノ。伊。幸。而。く。多。ひ。果。を。リ。レ。輕。く。而。リ
ト。リ。ノ。主。象。象。の。主。く。事。と。レ。セ。キ。リ。ノ。主
キ。セ。キ。リ。ノ。主。キ。シ。行。ノ。主。キ。シ。十。五。夜。の。良。之
ア。ノ。ノ。者。も。而。の。妙。キ。シ。主。キ。シ。主。キ。シ。江。戸。中。の。所。ど。と。主。元。主。買。リ。主。を。り。レ。ヒ
主。居。レ。ノ。主。と。主。男。の。衣。服。主。綿。の。ア。主。キ。シ。主。キ。シ。
ア。ノ。十。か。う。よ。モ。ニ。と。く。被。キ。レ。レ。被。着。

古の如く皆旅也 在木のわの旅寂寞いくつもクマ
モ一寝覺る後は傍り傍りある侍従の下婢も省
セテ有らがせむと志士リニテ子ヲ旅を計リ
舟とリシテ一暮萬人越ひおもいまざ沙海
を一々漕出一々りゆると船の者より多幸れわ
クハリカドキニシテ沙りあめ方ハ向きシニシテ
炬を人の肩三てかづクセーと而ノ何れもくち
ノウラヨリ生したをかほし附也花柳ノよひ
中波の入ハ故席のあそももあめゆくお量り御
猫モ多喜ヒヤモニ猫のあきし聲と煙草の
烟ノ聲をかすオロ上手すも豪華に重んじ
て居りと也何れ

憲廟の朝の人々の物 第一ノウ政局を云々

○留聲漫筆二編 安永八年乙亥

日本橋泊在所多井川村九郎七房内と大下清洋用事
の町人多うとあけの風情の人物多く秋先生より
毎夜シ鶴毛の友人多うと人の大加の娘先生
高木シ本と號ひきらんと有る者、下野
千利と秋先生は尋ねられし事多うし中義の古
黒等ともぬれ性すと申すと多量くひとりゆるりん
とテニスウルリヨリ主者へ申すし主な三衣多
古の災はタれ主事承七年の春ニ第事も又さう

タリテミウルハルハル狐狸の正ねがもあうも無勢
の黒れとモ祁縣と避る。カギトナリ是を戴クエ
キモ桔鹿アシ鹿(一ノヘツモ)シニルマシモサム
駕ニ歎定シテ夫トヨニ来。みわくは口致無く有リ
色トヨリテソト御(セイ)テモテモシテ川村、下屋、
森溝川中町、乃至一ノ喫トお湯和モカトシ本
庄の猿江の山並と而ツアリ有リ也。モササ竹の山
表内ヲメ稻荷の祠多シ。モ稻荷と彦根御宿の内ヲ
代リテ代主游居し。アリミ稻荷と彦根御宿
の内ヲメ稻荷と彦根御宿とヒクセキ。右の田代婆と
チリキリハ多稻荷アリモナリシモ右のサワド
ドリニヨリく御室し初キノカ通瓦也。松ひみ

ナキ御主の御名アリカレと御室たられ有リ
事き而御事れハ是然而くガリほきあく井上
銖三ト松の逆座形ニシテ是モリムニシテ右の女
子也御食の口事少ヒキキめニテナリ五合んと思
ヒテ井上様内ちを越ツテナリ。おれと妻と卒く
御ゆの養子をさうく戻リ。木屋主と由古時也
トナリ。おれと妻と子と木屋主と妻と由古時也
ゲ初モヤルハ生て服かく生と左官屋子とがぞ
伊太守と御室シル。立退んとソレと由古
坐て多母向用を以て川村方。先年來

竹川村ノハナニモミト下忍成ノ稻荷ノ祠先
主ナニ並ウニカニシテ、舟き童の子在ニ後ノ花
主ニ拂一未了レシテ、千石御も已れラウリミト
合起風キテ、千石の車舟レバ、向うモと見ルニキ
ルハ、亦リ北董多田の口モカクハナニモ、アリ
才く禪を立ミ和氣キモ、才極、重シヒツヤル
花川村敢ニヨヒタマリキモ、至母立シく
取組、度々カク危んと思ひシミハク、あま
玉多物、行リテ、おは高ヒ川村トニ男、掌固
ルホ麿、手の男、高ヒ、高ヒ、シテ、底ナ
ニ桔梗切リトニ、モ、母、ケル、クニ、差し川村、
ノカヲ、終ニ、佐、み、ウ、ね、手、とい、カ、希、ガ、幸、シ、ヘ、津

の事と流氣ルハ、そと稲荷と御の法の内、如何
み得ル、とめ、九族、モ、トハ、不痴のヤが、ア、と、く、う、キ
ツ、メ、モ、又、お、の、向、リ、キ、ヨ、シ、シ、サ、セ、モ、レ、バ、但、レ、ト、レ、モ
不、情、ウ、リ、男、カ、レ、出、ト、遠、ク、山、一、茎、キ、タ、タ、モ、エ、ト、レ
カ、尋、ね、高、ル、カ、レ、ト、ソ、レ、高、カ、く、ヒ、川、村、又、案、内、石、音、
シ、高、川、村、主、翁、本、木、多、知、少、序、高、ル、ハ、重、能、主、
天、の、ソ、キ、通、主、元、モ、オ、メ、ヌ、メ、外、ラ、ウ、サ、シ、カ、ル、シ
馬、テ、ヌ、一、ツ、の、移、ヒ、草、ト、西、一、経、ヌ、モ、ウ、ル、カ、レ、ト、角、
脚、キ、ノ、足、モ、川、村、カ、ソ、ア、人、本、翁、夫、高、モ、モ、
ソ、モ、モ、ア、モ、モ、カ、ク、祭、ウ、バ、立、者、ア、ル、ノ、且

孤と云ひては肩の筋の者かるど外をきづら五
ヶ二ヶ十ヶ尋ねましる。而ち孤と號く
宦職と名前をいふと考へ多度往々の形見を
大和の者も中と申す。かくぬまの所
此一はおまきの所。而ちハモハモの處のいわうに
もうれしよた御ときは、多忙のいわう。義理を
たゞ仰てモカく宿はゆめん。此ど以てとて
至在所也。三作在處もやうと云ひて御
あまらうとすよ宣多ゆ年人と仰うをりと云
く先生御神りあす。稻荷と同多也。而
御きゆもかうしたせせられきり。少相神のま
テメ記り。作りがき

○廣津先生。諸舞事体。人ありてあれども書つ是
ゆみうべの外の舞能と世の人見る者少し一舞
は實力不足の舞内乃至先書事細工る丁見
鑑を仰七舞と仰す。持る馬脚もあらじ。又
日光と高野けさうと云ふ大不因
並ぶ亦物事の舞能と志意を存けり。又
仰る所。山雨の音。又内高文の鑑み。又舞
手を數く。毎可。之と書をき。有がる。君文と
ハ初キ。又。山雨あらじ。とよか。とお後あら
ル。夫も。仰き。と。又。通か。若。り。うざ。又
方。も。ど。も。是。不。め。き。し。の。人。又。ま。く。く。い。き。る
者。仰。り。是。や。の。下。薄。す。封。く。自。教。作。古。初。の。

企するよりかれば此が事を知りゆうと發する
といふ事の如れが如き近よりは持てまつたし先
づは陸大の在臣の權をすりて自らも如くとこ
へられし在大目付千石を以ての所而も元父の徳
母のえまの至りてから

○在義の友ある眞佐といふ人あり四十九才の大
吉源正高嘉助在慶門物と識名ともある。想るに
左近ノ名志種教教り及ば男弟都属る
今ノあるが爲せても大吉源也。達ひ上京の
事方御、名ひ西ノ雙院と號ひ者也。高麗子
も活け年花むと尋へて在御と乍ら不遇
たり伏見急毛毎ひもるづしよと云ふて左

細々夫ち在寺一うち取るを義の細々を左侍某
の子のしく知重男もしく身の上をもうう親
くも有きる所より見附に果る。すかく
是れ和賛をされよともあられども中く義妙
セキ有模様在再三に及びて夫うる高弟の方を
訪ひ乃手し布のうるおの不遇の事と申す。もと左
傍ぞ。御の御。要ひ滿面か。帝て見物せしく
多う。うちうるりと手をちらりと通ひて滿面中にか離
す。まうちふ達ひく細く。終ふ。うがめね
あく。内高坤。内。匂ひ。といふれ。上方そめ
思の松もまく。ひめがまよくく。ナ。ヒヤ。ナ。モ

初天辺の向ふあくへりくあむりをあうぬ日はれが
ソソガ向きあむれり。め何ゆるりんアセ。ソウモ聖
晚の席は向う十才の経典佛例、通法事。がさ
市ヨリテ本ノキサ初心在本店の上世様の御在所
お神の御不敵付へと吉良處多モ居て此ノ芝
の泉井寺五所くとも通。幸いと口くよゆくある
左真佐附の太古の連ひ番句の教仰の思ひほ
徳美の向の差事あらじとあら。麻衣子の湯御す
夢ニテ夢をさしてしめきをまく。いみくらのすお
達局くばくある。言勝色の酒肆。音く
新しき様は酒之半船と膳花ととれまち
名ク。湯御行ケ。立はれまじあゆる。

代科一向みなうり左近者一右羽織を質。主く
は方ど。右の代科を亟きトシて調へ。若松山
ト精り。市川バヌヤル。而後日主。外人故縣
奉並居。左右の伏ふかて義士。中大弓。左琴
五キと訪ひ。右市川。も。而大弓在琴
や。右主を至。而段人の内。辨護と略。其代。おも
あう。う。人主。も。わ。あ。ま。い。と。う。左。方。タニ。右
主。一。ナ。ヒ。也。血。例。而。達。主。度。カ。ヤ。右。脇。右
右。主。南。ヘ。も。右。シ。經。降。多。の。伏。ケ。中。中。右。兼
て。相。領。右。羽。織。事。ト。脣。身。主。右。そ。モ。右。

事不事後決して佛りも阿彌の事後より
事前よりはまことに事後代料の指方所
事よりへた佛心をよく事前よりはゆだる事
やく事所佛より事と事と事と事と事と事
事より斜りを度量う所とくや日時代より
人を佛得照相とゆく切実なりと有りはを
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事

○ありもしの魚りもくきく大さうる事何程あらん
とも掛目貳賣五事を教へ見一母六万五千枚
手すり夫とる三物教と計里みれ、一段か
かく五万五千枚程事とて志州の廣宇田川半島
海をさし

○もろくの奥形、ありあざいの者至るも生ずる
あよみけうもとが人の是が食ひとを欲せば
何の有る所の者かう誰めを生むる。とすか
こひはおる方とて取先生まづれしも由白あ
いのへ魚のねもの方とて、めもと子代産
へとおもて先とれを、わざあうあとうんと
空をひきあはせあらじ生れしはめをうん
の魚代産はるかうとて、まね松前つ沖と時と
而相生さる所とて、徳くめもと馬鹿衆集りす
在洋間のあく漁人網をさく太獅子をもとと
シテ主朝、西向す四角

○先年ニ三度と在都^ト游れあつた。蘭人^{カランス}
指東^オイキリスの都の易^ト見^フる。中國^ハ大
國也。都^ト古^シや^ト大河^{アマツク}大なる石橋^モ
至^ム欄干^モのあ側^ト。中屋連房^ト。多^シ人の歎^モ
詔^モ。ソヘ里^ト。石都^モ。大都^モ。多^シ人の歎^モ
騒^モ。大凡^モ通計^モ。而^シ貳^ハ百万^モ至^ル。
ソヘを伝^シの人歎^シ。アーウラ^ス。故^モ。

○德^モの移^シ。參^ス。中西尾^ト。傳^ス。三浦^モ。慶^モ。慶^モ。
時^モ。館内^モ。一人^モ。比丘尼^モ。十^シ事^モ。ゾーメ^モ。有^ス。
ノ弟^モ。新^シ食^ト。中^シ都^モ。店^モ。設^ケ。住^モ。
十六年^モ。來^ス。一^シ飲食^モ。詳^シ。多^シ。有^ス。萬^モ。モ^モ。
仰^モ。身^モ。ト^モ。め。無^シ。も。御^モ。か^シ。穀物^モ。い^ラ。

タタ^シ。名^モ。アラハモ^シ。ミ^シ。代^ト。メ^シ。ト^モ。ひ^シ。ア^シ。
但^シ。本^シ。縞^モ。ア^シ。本^シ。縞^モ。ア^シ。ト^モ。シ^シ。幕^モ。
の衣^モ。脇^モ。こ^ト。うひ。是^モ。持^ム。山^モ。上^シ。危^シ。食^シ。
生^シ。命^モ。全^シ。一身^モ。財^モ。ア^シ。ト^モ。ウ^シ。高^シ。之^モ。奇^シ。怪^シ。
す^シ。秋^モ。自^シ。先生^モ。少^シ壯^シ。ト^モ。時^モ。如^シ。在^シ。事^モ。詳^シ。
子^モ。金^モ。厚^シ。ト^モ。少^シ。うれ^シ。三浦^モ。度^モ。の腐^モ。
初^モ。生^シ。あ^シ。ト^モ。沙^モ。君^モ。度^モ。ト^モ。厚^シ。ト^モ。因^モ。也^モ。
之^モ。か^シ。か^シ。君^モ。尋^シ。ア^シ。口^モ。元^モ。多^シ。考^シ。嚴^シ。ト^モ。沙^モ。
出^シ。蓬^モ。ト^モ。口^モ。元^モ。多^シ。考^シ。嚴^シ。ト^モ。沙^モ。之^モ。
考^シ。ト^モ。向^シ。有^シ。考^シ。所以^モ。切^シ。考^シ。嚴^シ。之^モ。
是^モ。身^モ。吐^シ。ア^シ。膈^モ。嘔^シ。而^シ。食^モ。与^ヘ。モ

例ももま人の飲食へく又り物と進のく保復
ありとまの性無ある可り強く是等と別るモキ
ハ嘔毛する事一ヶ月して至る年を天セキモ
タリの事無の事を御つモキハ生原をほかく
モ切ノ如松ノ里アリトナムアリテ内義兵外
西洋兵の産セキル國シハ皆ニマニ兵の兵平
名譽營業害邊と而すカツ韓亦抑ハ承平を食カ
トソヘラ本平と食ア萬セ西有無ニ因スモシレ
平カツ毛と以くも兵の熟牛アシカく生原と
金刀キヨリ摺トカツ御ア重シ後益々彦先生
ハ嘔病を患ヘウルヘラ飯食を絶く保養カラ
湯浴は行ふ放たんヨリマシテ四十ニ年の歎

ミナカドリミナヨ匈ノ匈ノ室ニ多見テ五ノ月
ナキ露ニ及ヘテモ再び風塵ニシテシテハられ
内ノ役者せられテ又蘭亭先生の甥アモ皆生
莫体きの人物アソシ人ノ心みを繩主アモホノ痴
ミ萬ノヨリ至れハ断食の法を施ヘく病發ナリ十
四年と音もつてヒテ御ハ其得て食ヒル
物トゆリモ其め食を絶去ハれハ法勿相
ヒソニモ反覆の夢ニ叶エ得モ向

○理外の理立テ御座候御事はく御ゆめの事
事少申東橋昌臣所居ニ一来居てやめリモ
之を至りし因身ゆきとソアリカく痒ニテ
而モ搔くときモ立モ不承轍のゆき蟲也を

曾方外の高弟ひかへと先生すも神しくて
しその生長の有り難い事不思ひしる思ひ立つて
誰も以て二村土行無事と云ふ儒生も曰病氣
是の政郡一ヶ所痒て覺えく搔ききは裏起り
一御りへと曰くも生じ在人而時々又醫州鹿
山庵松田東溪尊る一怪術を見一と是の傳内
地川彦と云ふ有體勝手よ此毒の如く漫暁
ノノ度と病の所を搔撓せん歟すと内に
多氣を含みて石かく、透吸り左根針と施す
此の創口より血を一升束ぬく一瞬の間
氣の協の如き也入失せぬりとも云々奇怪の
事すと云ふ血氣多能如く生長歟口

○
身に於く一病友若頬勢は如升く生長歟
先セテうとて有り又在若中村式郎左肺脇に
余病を竹田彦平瘧疾也これ有りて少々薦言
癆積多年の病氣す了一日高弟ニ要ひて塊
物を開解され其れす。彦平二丸れり。彦平
猶一々ニ火をささき開きしよ大きめの玉龍を
圓をぬけかて生長歟持病平康アリトヒ
ヒ竹田亦寶物と云。彦平セラヨシと云
夫々互り以もれ何處の事。又之を審して而後
と云々身に於くもの有り
○

銀と斗りぬ似てゐる。19世紀英國を銀白序を
持つて日本に日用品を貿易する事と同様に銅板
も舶來の物である。英國多種貨物五萬石又三千石の
者と持ちゆきニ此と掛けく見られず。ソハ日
本商へ多額とばかり掛けたる者、英國の
如何の目でソカヨリあらゆる物を一通といへ。探乃
全圓向印を。先ノ疾五十年之病歴を尋問を有す
内うされハ如何。之を察し教訓より因て事ある
と詳々あるを宣へゆ。是をヒトアヒト何万石と
目形の如何なる物を斗り凡てソ同一す。子印

脉一通多く経忽々沙と施毛ハ目苟知財す。一
て少ヒ知ひやう目形の物とキリ凡てしき事性は
そぞんよかけ高ヒニタリテ。まる拾ひ。よりア
メガ猶豫狐疑の旨。病人をかづしよハ里をくじめ
ヒヒ或人ツナヒとぞ血ぬきす。醫院など衣服
を廻さし當ケイ。子午辰の見宦易着の際。門前
五列坐の時。仰め。ナ侍残を廻さし。ソ文書。且
仰れ。白ホナ本の高。日。身。心。誠。心。ナソレ
ル。一書。首。行。御。門。ニ支。の所。而。ソ。送。マ。未。當。ナ
多。人。モ。ソ。ナ。申。レ。バ。先。基。シ。ト。ハ。考。ニ。メ。向。女。付
キ。ソ。ト。云。差。日。暮。在。る。者。新。將。用。タ。ス。何。う。ド。

ルバ摩泥御^{モニ}御^ヲ木^ノ木^ノ兵^一る。高^ミ氣^ミ將^ス角
ひ^リと^スの^カを^カ切^リ廻^シと^シリル。此男^モジ差^ミ
任^セセモ何^カ玄^遠の理^ハレ^ヘト再び先生^ニ向^カ
キル。彼^ヲ玄^遠と因^メ。先生^掌曰秋^立うする日
彼^故の名聲^{ヒメイ}とからん。そ^ニ鷹^ハシ斜^キあ^リ。レ^バ
矣^シ從^カるが何^ル血^ク也[。]思^フリ^シ。

○近き年の事初^タるが土佐の國^ツの後^ハヤウソ^ハ
丹^ツ々^ニ酒^{アサ}ド^リヤシ^カ。其^ハ貞^ヒキ。危^カの丘^カ
ナ^テナ^シす。久^シく酒^中沈^サレ^シ。見^ム。妙^シ
上^ニ具^セ物^ヲ村^カ。多^シ内^見ま^シ。是^ハ妙^シ
あ^キこ^トの騒^{ハシ}く至^リ。し文^化何^物事^ニと存^アす^シ。
ゆうに京^ハ脉^{アリ}。而^シ京^ハ物^{レバ}か^レ。昨^モ一^日や^ハ。

か^ル日^暮兼^シ後^ハ布^レ御^ル。持^モ東^シ。多^田篠^山御^先を^見る[。]
紅^糞を^んん^シー先生^み見^{られ}。高^ミ氣^ミ將^ス角[。]
ウん^トも^{嬌^シみ}見^{せり}。是^ハ紅^糞也[。]
あ^らん^ヒソ^シレ^ル。後^オ筆^モ國^ハ玉^子も^あ。
と^シみ^カさ^カ。鐘^と鳳^ハ七^七。鹿^乃重^鐘
は^シ。安^喜。手^レ多^シ。家^勝身^ハ。あ^ヒと^シ。防^一。安^喜
ヌ^ア。^シ。浪^急。あ^ヒ。ア^リ。カ^リ。ス^ヒ。ア^ヒ。ア^ヒ。ア^ヒ。
ウ^リキ^教。ア^ヒ。ナ^メ。ミ^諸。キ^シ。ア^ヒ。ア^ヒ。ア^ヒ。
御^ノ代^ナ。カ^レ。高^シ。買^ア。ア^ヒ。高^シ。阿^色。
袖^ア。皮^ア。も^ア。ア^ヒ。不^思。議^ア。考^カ。深^人。難^シ。
却^シ。戸^ア。周^ア。事^レ。門^ア。大^ヒ。切^ア。急^ア。あ^ハ。
ナ^ラ。勇^ア。も^ア。み^度。ナ^ラ。あ^ハ。ア^ヒ。

鬼を謝さんとひかへてお前一也不可思議な
たるある事す。土地や在佐五平と云ふ人また
たり見ゆうとも辛田川半島の物神をひと
而す。

○血まみれの拂不得の室匠は在秋文家といふ者あり
多君は重慶不詳とぞ是を拂へり。多君と
まきむらとぞすし。多君は松木の山
奥山林木にタヌ移さる。既に山深く大草
なる所すらもあらず。かのうハジミツ屋店居を
見拂た。妙人也。多君は驚きし者。多君は
アタマニ雨をまく。多君は驚きし者。多君は
ハジミツ屋店をもあらず。多君は驚きし者。多君は

さゆりよし紅色あくわゝき。碧ち叶拂す
をん。おつづく。まろりじつり。彼ノ名をどそ
あめね刃也。もろり。此モ要勢。あてく。玉鳴
丸。死失。あく。身。多御剣。磨し。知苦く
す。あれ。と。手。此。見。死。體。磨。腰。く
手。背。手。ある。も。痛。腰。腰。く。肩。心
ナ。煩。病。布。脚。し。手。セキ。子。
富。ク。ウ。サ。改。具。う。手。五。多。檢。檢。脚。脚。多
ラ。ハ。ジ。ミ。改。具。う。手。五。多。檢。檢。脚。脚。多
キ。ハ。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。
多。手。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。大。手。
三。世。間。の。モ。キ。シ。モ。シ。モ。レ。レ。重。持。下。脚。脚。モ

先生をかへりとく而れし又先年肥後より
内を之無を呑ミ角がくんどよにてへ毛ゲ鹿。
死する所あつち也子す方始後ふ諸事ヲ物
産の大鹿をあつる時細川格子ト叫うハジミ
羈縛ミ椎骨を切る此一と見られしは但、
エホ監能多々椎骨を薦め事根の日、椎
骨を切る者也細工七手ノ如き物ももを
至る深山の野にいづくみゆ往金者有る

○嘉永八月庚午夜空氣寒栗妙々々
床の剥半満月をたおし都下ゆふも云々
而くあつ微細なる灰燼の海印を晦あります

本島柳原村の音をうるゝ御名激塵
の灰をまきよしと申す浦田のをとて此れ
多くはあれど上方をも力滿市有間
東興寺仙郡の地とも引きもとと南鷹山田
急にニシキヌササも滿毛)とてお崎島門か
タヒリヒトモ禪ヒシカヒテモちくとく和諧
ヒヌスノミカウルヒトモアシナシ御名
山のあまくらんヒミカヒテ申既先を聞く
又十月終りと産那接峰といひ耶山の煙丸
火を二日の灰煙め多要の及びをうかぶ
人ニ許儀をとすと申す中津度の屬中す

少たるモノなしも亦あればしが此も下りみうつし
多きとて何より参考と爲る

某十月移る震病の甚中津船町井戸前を
着まつて另立ちてお歸り西ノ浦
一月又代々川浦十月移る泊原より能く少
ち生先室時雨と水浸弊ひ難いテ立害
の如く見乃處列石強く雷空はれどく僅
玉鷦子と名譽學習すに隨て旅し幸勝し
事へとく 細川度良役人中高聞立取
上高能也よ加那く義つゝ妻在也とおる
ト弟年少死後多云善いと帰ラサレ汝ヤ保
体在焉矣ルカモシ松鹿退院ホキニシを備

種増とナミナリホタルヒノ音夜地震七拾武度
峰に至里半才一山北半脚く少く方震動し火
石飛行多數有る三里凶村良田とく夕燒
朱海中大野うち浦と無湯の如く船頭死か
焚アリ心痛病患在ク凶村燒と兄弟帰
此よりゆく内宿れと度母舟膳玉と猪候方
而開店第並田邊世侯多ナルアリ不育有
めクナリトモ所止市主於石崎内席移行即應席
而移移外も夥多至し空疎アリ不以通ニ由
至一也

十月

石震初ハ房主小木主古屋代中津春ノ月也

月移日分二日晝時予之子為連雷音乃印南之方峰
ノムニ守人ニシテ不審ニ在モテ多モ度ニシテ者
我歸ノリトナヘ松列道ノル陸也書存写無而
目以上

十月十八日

武尾降多倍

區万九山下一件二年レタ第什 丙午年某月
達州内旅國ルカムス庄也近内是時未歸トハ
色々捐弃之御シテソシ候事也又多細
事多後事可也ト已上

安永乙亥十月辛亥朔夜有物如灰自空而降天
色晉濛瀟灑無聲僅二更至五更乃息積可升方

許遂書十韻

中夜衆謹噪門街盡而灰墮衣未看濕灑髮忽為皚寧辨
山川色漸知草木哀柘林驚宿鳥鋪徑壅園菜火肆博山
好羨和台禹猜陰陽愆六沴師相愧三大牛喘且猶議鐘
音在可推梵經陳燒劫歷史教詳災不寐聞雜唱向窓待
陽惟幸遭秋稼穀翻倒喜心閑

檢舊

日本書紀天武天皇白鳳九年六月辛亥灰雲 同十四

年三月灰雲於信州草木枯焉

續日本後紀仁明天皇美和五年九月甲申往七月至今
月河內參河遼江駿河伊豆甲斐武藏上總美濃龍彌信
濃越前加賀越中播磨紀伊等十六國一一相續云有物

如反往天而雨、累日不止。但雜似恠異無有損害。序在畿
内道但星豐穰、五穀價賤。老農名此物是花生云。

年代記明照天皇寛承八年三月十九日仄降加雷

自鎌四國史及日本紀畧東鑑等載而仄不可彈記姑

舉一二爾

己亥九十月

度會光隆草

○昔人仰慕山林、好之切劘。力圖之者、未嘗不三
休。或暑甚而初夏也、遙山高柳拂々人の許に
尋來者一者あらず。主人速々後移す。かくしても
虚也。あるを以て左撫御ゆく若し升末坐する。
而して主人の疾苦速あれば、身に通じてあらざる者こそ

世人力と覺え、ありと切劘し。かねざるより人々
已れりニシテ仰慕す。其事は少く、又人の詳レ
所く。此時より、所有ニ付膳、まんうを重んじやむ
胸刀を以て、手袋をきく。またかヒ人よりいひ
クぬる事。かく又曰く。手袋を以て、ソカド。あくべとい
ふ。又手袋を以て湯浴。食事すかと男の公卿。バ
胸の胸毛をそそぎ。手袋を以て、紫衣上け
ます。カクハ辟風。東洋を如意かく。布して
ニ袖を以て。かく。先も力と覺え。すすも第、
名を生ぶる。て侍の多く老人の物語す。そも
楚入便。かくも切されし

○初学者の心乃ち切劘を當へまつて。ひらひらと筋

と爾立て産業を、アシタノ者立て在と聞え
多緒を商ひる上也、キミシハ店を立て候、か
ウチタヌメ附ニテモ、カツリメんれのヒト、キムラモ
集シ、セセヨカバ、アキノアガリ、在れキ
和す。思ひ立ち声す所も上世経歎。波ツキセ
キルモノ、上世習む所様、而叶咲跡一もあらず上品
モナリ、多外、万、度、有、可。左序諸子万歳、有
モナリ、左内、タル、モ大斗キミシハコモ、左、疾、有
而、有、ガ、ち、との、モ、永、集、モ、有。諸、方、モ、ウ、め、キ、在
ク、モ、人、の、年、老、古、而、病、モ、アリ、シ、能、底、モ、アリ
ト、アリ、左内、コモギー、モ、たる、モ、キ、アツメ、モ、アリ

○主人居室かれハ、とも悪くハ珍也、うれも、先れをあ
く人あルバ、そぞ何、クモ、五、年、リ、キ、方、の、目、の、四、年、
シ、ナ、カ、リ、ア、キ、キ、母、日、ナ、リ、ケ、モ、候、飼、シ、ム、モ
ケ、ウ、キ、モ、レ、モ、主、人、の、事、有、る、者、と、見、タ、リ、モ、五、年
モ、十、モ、以、尊、明、ニ、キ、ナ、テ、モ、同、ツ、ツ、ケ、ル、ハ、方、共
ニ、限、リ、モ、但、ア、モ、モ、一、生、先、れ、カ、為、モ、ウ、リ、モ、れ、モ、
浦、す、ト、思、ヒ、リ、モ、ラ、カ、リ、モ、リ、シ、ト、初、高、モ、キ、ア、モ、エ
モ、甲、ヒ、寄、高、モ、キ、ト、栗、山、の、表、浦、生、モ、リ

ル、一

○土君お事と立身をあけんと思フキモ、識量大
かりも、く、と、か、東、ね、モ、あ、いつ、の、路、モ、う、あ、
ん、ま、る、傍、信、大、造、伽、藍、と、建、立、セ、ん、モ、の、志、れ

一人せ詮向まくありす。とて寺僧を
因縁へく門市やまと伽藍建立へと降りる
巡行セー、あちうそぞらに一二度の声を
一あつれ立傳承を更んとすれ。徳方ひ
けり。左より未だのハ段をあつめられ。がと果
の度く厚きすもあらず。多難細弱。またか
目を御す。心承くして私と古ふ言葉曰く。
見ゆ。三度の召月。引けりき。能くも
傍人至人とも見ゆ。毒物深懃かるゆども附
の豪氣を異ひ。毒づキ。其先は。接觸して
効化縣へく附さし。又日して。不覺。如前
一言。とぞ子承庇五方羅漢の建立を始へ

ハ京都のどりよみあく。 作と一軀
のと持來。とせあがひ。と賣拂。と。金
あく大ひ。か。佛。三ツ。を。こ。り。く。淡。あ。よ
ひ。か。か。か。ユ。万。う。か。ん。建。立。く。と。日。と。呼。い。う
く。や。つ。の。百。よ。う。あ。れ。移。の。大。業。本。祖。あ。う
古。人。事。を。創。く。三。代。目。住。持。ま。く。と。く。大。業
あ。た。う。と。ど。中。男。族。の。つ。わ。が。か。る。す。り。根。か。れ
よ。大。か。く。よ。く。う。あ。れ。絶。の。よ。到。就
す。と。起。ま。れ。ば。物。の。本。性。き。す。り。か。う。と。ど。而。か
き。す。る。よ。走。る。か。

此圖也者

刊

總見寺殿贈一品大相國公近卅安土之熟時有人快閑
胸襟下捨尼箆傍設蚊帳左持直木右擎簸箕者也是形
我國之諺於繪事而以教人也敗夫知之牧豎識之不用
訓詁者矣見者勿以易解忽諳也儻施之於辭則曰其為
士夫者心體廣胖氣宇高直而內無詭曲外勵家業則終
能保身也繫相公之意而從著至微之捷徑也所謂脩
身齊家治國平天下之道而不不出乎是矣厥曾孫織田貞
幹臨宇附乎山謂曰斯事逸乎家譜惟志告旃請作記永
貽將來學書顛末

元祐元歲告以辰十二月穀戶

敕住法山當寺六世白翁口識



印

印

印

筆の事

ニメ國や男をも手をひきく一モウヒビテ
持ることくも有日すとくへ立をつゝひ御不
可くれのう可也御すらかせく是と危とを
身と止めどもさむへあく花と煙ちお園
城モ血汗のうちよ知ちセ一時於アリモ
カタケモも往ひ後後の人々の口とく見えま
スカタシロアタシトヨコシカヒモ
ヨクシテナヒシのねえうまと織田貞幹の筆

カタヒヒうつて後モセキケ尾張國清山あちよ納
め縁(ミタマ)モ男をあすを莫(モ)トツモ
相國(ミタマ)モ(モ)ちうひく手テヌハシル
也(モ)人(モ)ナカタモカタモ以(モ)於(モ)うする凡(モ)
ム

○留聲漫筆三編 安永九年庚午

所(モ)十人ほ(モ)ヤ栗(モ)多(モ)廣(モ)と(モ)人(モ)手(モ)因(モ)役(モ)
田(モ)嘉(モ)八(モ)と(モ)人(モ)易(モ)と(モ)喜(モ)ひ(モ)娘(モ)あ(モ)
く(モ)娘(モ)妻(モ)夫(モ)の事(モ)う(モ)兩(モ)弟(モ)兄(モ)け(モ)
日(モ)一(モ)年(モ)二(モ)三(モ)及(モ)そ(モ)死(モ)セ(モ)生(モ)キ(モ)キ(モ)

ち切る。右附ノヤモニルオホカ病モ必死也。
ト死後ニシテ三日又モ仰先ニ書元大島屋ハ
度々（生れ出）^トかかはリ多方面トモうひ更ニ
本のめく書方一其の事もいひく絶てん極ムト
多矣。すとおれどもいひく絶てん極ムト
ト書所内ヌキの年も経つてもきく印シテ
ニ事は向々夜御の主よりくアレ死も方時や
致セ一とく太常教（生れ声）^ト年少をあざ
リもれ経たばせいうるよりまきも
テウサ財テモ不思議莫ニ思（は）思はず能
絶（め）の如ニキ。たゞおとひヤヒルヒル
キリまゝ行。彼等ノウカタカタモアルモかく

○ 捧手かつて之に由テテアシヒノ修を以テ大吟
歌ト尋あれ。梅多ニヤアガ生至トトドクニ
思テ松井生めニ生れ出んといひまゝ多の生れ
主の白子。御門もう、かひりかへとありのト
キ大角歌トシヒ入まうひあ事。ミキシ祖去
テミスウセキヌ石鶴半也あつてはとこ昂因役立役
佐主多處の物也。ト。音性ヲナリ。

○ 石門紫や山田平左衛門シカヨミ日をわ鑑セし
んル痛くいき、ソレケルお善枕（よし）佛飴
を乞ひよ道の市街樹（木）ハ車の通りかうと
主の様このちん玉日既愛セ一とすかル也

平生は格行と應の隅すらも望一尺の圓をも
かに二歩ずと薄三百丈深く於此と左心義
知りて風呂敷を包み籠の傍より入る多數と曰ゆ
禽や多くたゞ根のものと村歸りんむいふく
一毛後者と本草へ附傷は根くを薄とも食え
物後く帰りぬ而歸りと云としく左きうす
口數多くあせむり四一ツす中ひまよめから
うう花をいか向むとれねばしと云儀ま
ちくわくまゝかの儀と云れぬかの食くすれ
うう花を已つはいひぬさん不思議くとキア
キの一事の聲と先祖の名づけ仰へてかう平
生唐詩古集里へむじ和乃の詩をくれだ平
生唐詩古集里へむじ和乃の詩をくれだ平

之居先れりあぐのゆを耕つたりとまゆのあく
あけよ而せ一左手くんとソヒルハ神そまゆ
さくくはち中華書類をかゝ多き事すへ宇田川の
年を唐歌すれ

○霍少子といひ乍り嘗め卯東の中子とあく嘗め
極育へどすこ者ぞうとあくすこあく一の有り
在りも嘗め萬りゆるまくして方てようれぬタ代
ソカク一左手と否身集まも多體の連惠磨
の新草へ左

詠霍公鳥歌一首 并短歌

鷦^{ウシヒス}之生卵乃中爾霍^{ハキト}公鳥獨^{ヒトリ}所生而已父爾似^テ而者不鳴
己母爾似^テ而者不鳴^{ナカズ}能花^{ハナ}乃開^{サケル}有野邊^{ハタケ}往飛^{コリト}來^{キリ}鳴^{ドヨ}

響橋之花平居会散経日雖喧聞吉幣者將無遐莫去节
屋戸之花橋爾佳度鳥

反歌

檢霧工雨震夜平霍公鳥鳴而去成何惜其鳥

芳七メ

那湖の浦を駆瀆きあれハラサカウニカモ階
砌の何足也そのれあ

芳十メ

たまうるかのち如一とアムンカミトミテテス
名とナリシカウル

芦推シヌ

トランツトランツ

父とエリクミーリムアリ母とエリクミーリ

芦推シヌ

トランツトランツ

父とエリクミーリムアリ母とエリクミーリ

ウヨイモヂヒキリヨ。いのタヒトカメヒ

芦十九歌接シヌ

鳥名斑鳩

鳥名

うつまうれて夢シタシタシタシ而くわきにあくし
ドリホドリテキシテ。うくひすのうつーまこかと
モ流り。ちくれども夢の霍シタシタシタシ生み落す
子かの。又霍シタシタシタシタシ母名波、萬母寄れしく
移育切き志創のす。本ニ多難を窮屈りと
シカ学頃日鼎山先生勇秋東私杜鵑の傳を承
く是を後却少杜鵑を多性主に有りとよだす産
育。く嘗の萬母托く育すとソヘテ蘭若シ
シーケ羅甸池をツキヒスヒソア羅甸多社書せ
キツキヒスツの神ニシシシシトモ神を祀矣。淫

する畜夫の事と云ふこれ別化事の巢の事は秋穀
の生産とくまうと見ゆ所育は畜まつてと
云ひやうへておもと見ゆりて是畜性主は
て自畜と能くも畜め持むの後畜の的実
をうすありと畜主自先生へつてもよみ
牛の下加森ゆく柄田大へ山廢本憲あ主の底の
ササウの巢とまつておもと見ゆれ
すあくしを畜貪畜の印巢も夢の難と生
長へ居ゆるを汝み印あるをつて跡へまわる
印あるをいえれ終と杜経とけりと南幸のこな
掌の萬ハサキとて左房とも巢の外と至爾
御御うづり却る句とて身の性へきとすと萬川

主は拂へまく杜経とけりと拂ま一ツの印あると云
ひて云ふと見ゆるまきゆめ而キシ夢の印と
ちりあられも杜経、夢の三畜あると云ひ
立セリと云ひて云の説は杜経の篤の性主の後
と詮對立、あんずる掌の杜経と產姫とがも
自然の後降の主成ルルとて南極の程も考れを
詮高仰にほれと却く篤の性主の底と他巢と
是と見ゆらめ着度の後をばりまわしこと云
木原綱目杜経の傳ナリ惟食蟲蟲不能為巢居他
東生を云ふと半時移後す

○東川紀伊守度京都太常院とく伊能の日記

王サホリト愛宕山ド聖一山シヌサニ坊主アヘ

爾阿モ無事御事也爾也爾也劍術トテシテ
蓋アマホカニト御刀を奉持セリトシヒキ
此を取ヒ需給ト御持ウルヒテナリルモさミ
もシテハ梅室組さんと異ナキヨミモモシ
生多風の者半身スキト元シク因ミルカタム
芝山ヤ禪ちよ新うだすオミタリミツコトニ
初モモキシシタカツキタカツキタカツキタカツ
芝西ドリ弟川島ヘ而青ノムヒモ吉本甲斐云
仰歌、内うち歌一

○那のえんやくの引の山のといの月根園等の
例アシ那えんやくの幕

○カニカニ海のうす一那えんやくを巻きの山を引
ウトシテモ今日のいをゆーさとシカニトシテアフ
シミテ諸事アリム一シカナ

○柄麵棒モ引リトイカニ名有志那竹、金ヒカ
人唐タバコノシキヒ地豆モ柄餅モ接ヘテカ
シドリ板アケラソんめシトク麵棒モ延レ
キモイモ切一毛ヒモシモシモシモシモシモシ
カズモウヒヨリモ白シキ身事ナムカクシス

○肥後彦の任所地豆モ水虎角里
モの御は傳へテシテ正手サメ舟可トモシモ
集ヘアシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

の扇の御番と仰れり 挑出舟ひ方床へとく男
ルヘリくと櫻堂すれども先きトモテアシテ
三花、伊達とそひ買取事モトヤ鉢ノ前ハ金を
主方あゆうが西あつす事モトヤ鉢ナシテ
種トモエヌシのひく主方あとい川金家林セマ
花ノ加タトカクメ西ツリヒレドシ都西リ
多ナシキモ多ナシキ高音キ高ヒアレドシ都西リ
絹紳衣ナキ舟身惣の容面シテテ立まられル
候ハ

○將軍船の所聲、左近セラムとソリ

左近

此御番

○若井年丸馬レ 將軍船の所聲是師ニ鞠叶

左近

又住す一代シ因大納言様ト井伊家ナリ而具足
一銀敵すと云エキシ若井の家はおこりて敵ヨリ
は一科馬赤山並医ナリト切イヒテ備ス 生
涯の病難行かをと向シ若井源吉四日倒ケ
切方阿修ナ代ヒ柳す 痘醫すれハ涼立當ヒ可
代トの通名アヘ

○泉舟境の町家

の掛物と油燭形付ヒ方
葉章平ノ子く秘參のものからハヒモ銀之皿
ヒ御セハヒナシテ之のうち用ひ事ヒ振舞ヒ
シテシテ江戸口持奉テリ 田舎 之許モ
衆人間根くよ銀之皿ヒカヒヒ見すりダニ移參
何れハモクヒタルヒ人モ又一舟都の度大ナリシヌ

磐水先生隨筆卷之二

○徹桑錄

徹桑錄十引

以凡與政者在焉。讀此編而當嗟矣。欲耕王之野者在焉。
就此編而當行矣。然有說。今夫水潦溢而見危巢之全。暴
風至而知蟻穴之固。天明癸卯之於關東。豈啻水潦暴風
乎。希天下之人牧有感激于此。是子房氏之志也。詩曰。並
天之未墮兩。徹彼桑土。縐繆牕戶。孔子曰。為此詩者。其知
道乎。得英曰。作此編者。其知道乎。

天明乙巳昏二月

東興

勝得英疏之

得英

宣山

輪山

徹桑錄目次

總說

飢饉騷亂諸說

民情同異並勸戒諸說

嘆嘆

荒政

徹桑錄

總說

東奥 玄澤大楓茂質子煥父撰

天明三年癸卯初夏乃嘵ひす霖雨降り候れ其以
いゝ二月三月も雨歇らず草か衣身の纏ひ一と
僅み指折りく教かる程あり筆根の開き上つ
てこの國より旱魃の而りあつて汝汰きよ(ノ)國
より押益く兩の岸より絕也。時たり江あらば水
多月下旬より佐佐清向山燃(ナ)君亥齋といふ
而り山洞數十間の間俄々灰けむけむ近在を徧
煙草ひよきを生來りかぢかく妙石村在民庶
致百家賛門の前より漸却一人馬の死ひ縣く主地の
亦枝荒毛の田畠數十万石を及べといふあれようく

昔高川ノ刀稱川ヘ押ガニ瀧川瀧川在春既牛
馬をかけく男ナニハ事人シヤ故目もあてられぬ
事もよく聞く也何よりと監視ありルカガリ
シカ如慶和の廢き直國を勿論興和少羽の諸
國より及ひ江戸の所内七五吉海が主事が見
一毛をされ毛トカニカニアリモ竟一ぬ力
地御ヨリシテ至極中ト聖八日日暮灰ツモ尼
沙土ナムあめぬり主と雲雲ノ如く満地ニカク
而ヌリニモ左ナ席ナリ又トあり一日ニテカ
ロレタあれヒ奥羽の地ナシ灰降リ石ミテト
サカキニシナ第ニ霖雨脚ナシキシルヒユ穀の
矣ナリ竟承而毛諸民糾合のためウテトカ

度ナリシテアリラハ峯根ナキ東北の諸山灰の物
ナリテテ地ニシテアリシテ稼作を破リ多つる種
シニルヒシニリノハシイアリん秋ノ獲了收め
半作ナリシニリバメヒ人ナリナリ五秋ナリ仲秋の
收穫ニシテモ鬼角ナリヤクナリ日和からく雨の時
勝ナリナリタケナリ武人素ナリ主第の後陸日記
ナリナリナリタケナリ見ナリ貢百十石を候陸の日月
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
一月七日益段まくモノ月教ナラニ三月中向初日と聞
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

都沫原の鎮内神主室少く饑事流亡の民夥々
而りとく加茂の大難市多の嘗て

飢餓騒亂諸説

古きよもく河内内に本穀豊ひあき吾金と切り万潤
三井が升き年始在の段より春の潤すく裏加者
戸在か往店にて也済りするまよ月の生計を切
ク多く父子夫婦の生ま別れすの事は或ひ無き事
援を蒙りかうした加茂の橋辻にて飢渴のあめ
行例に溢死溺死する。よ縣下端辻の中
人の往来あらわゆ加茂を御所きかへ人あれハ
彼の飢渴を嘗めり百戻黨ともよ乞ひや追ひ
立手に止む事ナリとて人々これ在のま自ら夜

夜未乃通せまれよかうな所く五表益城の次
汰あく油珍り透りて世の中とくより) 此の
表より 此の事へうけをにづ群の表の源流故の飢
民麿とか稱) 莲川者く和よニシメシヒ食供乞
心中より日本橋江戸橋の近先橋千のちどり倒れ固
一端一瑞多く並店佐末の諸人よ物供給アニ直
目もあてられぬ事とぞありある人江戸橋の上より
店の飢民を数へ見る。貰白人争ひ及(ト)アリ
三左(ト)アリ神事の百姓事ハレシヒ嚴き附も在もあらず
遂多枚多く榜板を起付し男よサヌ教の児なり
ハも折まうひ飢寒誠慨くあらざる惻然としく
見る。忍ひてゐるよと申す。謹考の秋月いはよか

けくとひ放々と餓民をかよ施す。堅き力もかしわぬ
竹刀と見れば左近の町方、初はほよ憤情深き人
のあく白粥桶を入れて持てまつた一人、又汲み
與ひぬあり或も解毒の薬とくを祓死食物と
漏ひく車む至り又御飯かと持てまつニツ
三ツ種と車を取らむる見へり。おのれく日より
群々走る飢民數十人、左近はとく奉行であつ
て地はある。このうちの左近は汲し家庭を而りまつて
かうぬ者の方を汲まつて食政車をヒキナ
駆け出され羣ひ走る事ありて御行路
而放ひ奉りと聞けり。こう御せ詰年にして一役

ハ飢種教をくかくうねぬるに來り聚る又大
きいは二の空きぬかれ、又給物のうきの多く已
れ、うちの食物の商ひ擱止せ跡のみで、而て店
はあつて、うちのうちあつてのうちのうちの商ひのう夥
いとある。而れハ立ちあんあん種々の食料賣あ
く聲いと喧へまつて、物語の所傳下りて、傍き
あつて、中から一と物語、左近一人も武人、若
金の身ぬれぬるにあけさ也といふ事、然んと則
まうことを知り不得

少儀より嚴き而觸下り町とも粥用をあま
一作源元よりは町中戸頭は官承が拂と潔と
ウ粥拂を扱ひまつた町中より由来度を知る

芻縄ウルぬと羨忌あえ叶^ムす。中兵の賣きよす
片にたく多々の食料差遞^リ御きよす。麦魂
ホシタの軒糧^スのく食ひ續^キさう裏面小店の
ものうちとどりの子世^カニレ呼々、高賣の家^ア
家^ハ糧かく用するを稀^カ石食住^ハ者絶極め
ゆる都下の風俗^ハいづらかくは下つ所^アあ荒
カ^クも^ハかまう^イかし只本穀^のをかく酒^アが^ト
テ^ア紙油^の敷^シ至^シ窮^シんまく糧^ヲの財^シ業^ハい方
との價^シ事^ハ傳^シぬれ^ハ諸民^の困窮^ハん^シあし
能^ルよ^ハ大谷^高家^ア賀福混雜^ハ一大都^厚か
此^ハ領地^の収納^在在^カ諸侯^の左兵所^ア家^アも^ハ
手^こそ^ハ貯^マア^リ、^ハ力^サ主^ヒ呼^フミ^ハ人^アを北程

お身^ハ難若^ハ覺^ス、^ハ事^ハめく酒食^ハ飽^アア^リやうり
あれ^ハ米^の價^シ貢^シ一時^ハ數^シよ^ハかす^ア。
ナ^シト^ハ持^ル也^ハ是^ハ喰^ハ場^ア戯^ハ場^ア角^ハ等^ハ抱^シ山^ア
ハ^シ常^在在^カ人^ハあつま^リ通^ハと聞^クはサ^ハ又上
伊^ハ野^ア東^ア興^モ土^ア諸^事ハ^シ之^ハ村^ア主^ハの貧民^ア
飢^シま^ハ否^ハある^ア、^ハ空^ハちつめ^ハ信^ハ銀^ア
地^ア、^ハ故^ハ出^ハ無^アとも詐^シう^ハる^ア、^ハな^シよ
ナ^シハ^シ名^ハ拂^ハ、^ハ群^集も^ハせ^シの^ア而^ハの^ア沙汰^ア
き^シに^ハ命^ハ失^カア^リ、^ハあ^リ也^ハ、^ハ体^シの^ア旅^人
剝^ハりん^ハお^シか^メれ^ハ而^ハ、^ハア^リ也^ハ、^ハ疏^ハ、^ハ
ち^シく^ハ有^カア^リ、^ハ民^シ、^ハあ^カリ^ハ而^ハ材^物其^ハ
は^シう^ハ書^ハて^シ、^ハ勞^ハ産^ハく^シ佑^ハき^シ所^ア

立とく江戸より而序略のうと力用ひの並物
さへけりれどもうとあうとさへかにせらうと公
ある人こそ先きのよび思ひかくあう所行ふを
くうく世の擾乱は民方に實病より蜂起すと
至れりよそぞきゆき遠くめめ歎鬪の事也起らん
と多行すと武具を掛りてまきも一とあれよどく
あきの筆書きは併とてく物をあく半ばの用事も
致あくよ生異し常餅板を毎もあらまくとて
の税も例より多く多く持きくわづれう中もあら
諸國の領が争ひし諸侯の所からてあら農衣食
食の所から立候あけつゝもれくは猶経させうす
西方無事じと聞へ侍る事よしとくは殊さう諸侯の

國石をうしろ漸く日本といへる新泰は既す上り
の諸國すと承り一津のあいと此の外はゆきみばけ
よく人の公ひやく在てゆか何うう

民情困異兵勧戒諭說

寶曆廿年乙亥の四月より去年の積もあらねども與相
の地大きな飢饉をうし秋蕩の達庵先生との飢民の
ムロミシヤ深くあひれみるかあ角の時々脇んと解毒の
二方門施しる民百備荒錄といふ所行者と郡邑
お頃ち行ひゆうくものほと都宣所の秀律申椒堂
の達ひよ仕事とし印行とく也よ行ふに及ぶ
荒録と買本利と人ゑしとて又寄うこふれと掛け
方能行ありハく人よ西へとあく承めほる人馬と

聞けり備荒の諸侯臨時リモモシヨリ間ニ立候す。され
よ諸人の凡情かくの事も也。されども猪^{アヒ}矢^{アヘ}をくとせふ
至^{アリ}又或日秋官金^{アキノカネ}を^{アハ}付^ス。世^{アリ}あけま財^{アリ}うれひ
都^{アリ}の風俗^{アリ}。福^{アリ}ある人^{アリ}。其人曰^ク。府都^{アリ}の人貴
猪^{アヒ}と^{アリ}糧^{アリ}。糧^{アリ}食物^{アリ}。家無^{アリ}。年^{アリ}の山^{アリ}。款^{アリ}内^{アリ}。けき
立^{アリ}。人の食^{アリ}。食^{アリ}する。主^{アリ}。只^{アリ}。年柄^{アリ}。ありく
食料^{アリ}。主^{アリ}。滿^{アリ}。多^{アリ}。少^{アリ}。余^{アリ}。余^{アリ}。余^{アリ}。余^{アリ}
見る。庄^{アリ}。江^{アリ}。岸^{アリ}。乃^{アリ}地^{アリ}。日^{アリ}。一^{アリ}大^{アリ}都^{アリ}。都^{アリ}。
之^{アリ}の運^{アリ}。物^{アリ}。船^{アリ}。而^{アリ}。あつ。そ^{アリ}。さる。かく。自由。仅^{アリ}。苟^{アリ}
所^{アリ}。都^{アリ}。物^{アリ}。列^{アリ}國^{アリ}。諸侯^{アリ}。不^{アリ}。所^{アリ}。勤^{アリ}。文^{アリ}。代^{アリ}
何^{アリ}。ケ^{アリ}。古^{アリ}。代^{アリ}。陸^{アリ}。而^{アリ}。度^{アリ}。義^{アリ}。養^{アリ}。貢^{アリ}。多^{アリ}。少^{アリ}
あれ。卑^{アリ}。猪^{アヒ}の者^{アリ}。以^{アリ}。有^{アリ}。此^{アリ}。常^{アリ}。石^{アリ}。板^{アリ}。木^{アリ}。川^{アリ}

主^{アリ}。口腹^{アリ}。窮^{アリ}。極^{アリ}。者^{アリ}。中間^{アリ}。春^{アリ}。秋^{アリ}。菜^{アリ}。商^{アリ}。麥^{アリ}
之^{アリ}。主^{アリ}。口^{アリ}。糧^{アリ}。物^{アリ}。方^{アリ}。之^{アリ}。用^{アリ}。と^{アリ}。か^{アリ}
絶^{アリ}。而^{アリ}。是^{アリ}。而^{アリ}。あれ。皆^{アリ}。上の美^{アリ}。慕^{アリ}。のあ。每^{アリ}
自^{アリ}。か^{アリ}。而^{アリ}。豐^{アリ}。す。奢^{アリ}。侈^{アリ}。極^{アリ}。而^{アリ}。取^{アリ}。す。
京^{アリ}。都^{アリ}。走^{アリ}。七^{アリ}。左^{アリ}。方^{アリ}。風^{アリ}。俗^{アリ}。見^{アリ}。之^{アリ}。此^{アリ}。奢^{アリ}
平^{アリ}。主^{アリ}。と^{アリ}。聞^{アリ}。す。第^{アリ}。の。風^{アリ}。俗^{アリ}。見^{アリ}。之^{アリ}。此^{アリ}。
物^{アリ}。之^{アリ}。而^{アリ}。奢^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。豐^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。侈^{アリ}。主^{アリ}。
之^{アリ}。主^{アリ}。之^{アリ}。而^{アリ}。奢^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。豐^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。侈^{アリ}。主^{アリ}
主^{アリ}。口^{アリ}。腹^{アリ}。萬^{アリ}。主^{アリ}。有^{アリ}。口^{アリ}。主^{アリ}。有^{アリ}。
御^{アリ}。民^{アリ}。俗^{アリ}。物^{アリ}。而^{アリ}。不^{アリ}。境^{アリ}。伊丹^{アリ}。池田^{アリ}。等^{アリ}。間^{アリ}。世^{アリ}
聞^{アリ}。主^{アリ}。民^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。民^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。民^{アリ}。主^{アリ}。而^{アリ}。民^{アリ}。

餘とあは今々きうしやうひーあら、今本のゆき諸國の
山羊ふ達がく床の人は多く多價更にれひ已えかく常
ニ用ひる糧ばナード用タクニ服ヒテ玉、松
文雅御の荒へうき代神のよみがえすに古風又か平日
の者、あらきるゆか、上ひのありハ一輪考ル、
今江戸の食物福地の事、あれバターチ雅樂は思
食きはありとて、余此れがよく弟代舞つて
導くくあらむ、か、金店り、天地世界の大
大代以く考アル日中ヒカニシ、も実ニ穀臺
饑万物蕃春の地、多く多變年劫、也沃能千重
天狗のあじつ、也、印帝亞地方、も本穀万年多く
一筆三筆ヒヤ諸國も聞やれと、西洋諸王都く添

土の西川ある在國、ヒ穀、御産せする縣しまで、
本邦の年く通貨、素の物の竹幕、它極も多地裏國か
「く麦をせつね、稻々産々を而凡そ他、の食物にて
生産が全、本と用ひ、すより、以此て、也あれを
少く世界へ、かけく、病を而取て、ちりく江戸を
走られ、日、武府の内とも西川の方、あつて在下、
神州の田舎、極り瘠地多く、稻作全く生長、多く
無く、麦と里芋のと用ひ、而ゆうに、與石の地、多く
田地絕えかけれ、せうち、とい、而ゆう、實代餘、
作、或、いひもちと、鰻臭、ども、めく製し

く不乃う食料と而生とせ。只年號ニ常句ひ。す。
税のむちうつ麦の飯ばかり食アリ。は侍。ぬ
アレのまかに日かあや。もをしの國ふく。
無事の山家とて味噌かく。松葉が味噌。かく作
食のじかの乾少うるまし。松葉とて。生原げ全
人備よかけ。方よもかくれのうきぬく。か。わひば
とく。よ。かれ。冬タ床。ありきりばとく。下腹を裏
う。よ。也。松葉も沃土の諸物。五穀。か。よ。す
餘あれ。知。よ。毛。い。る。あく床。とい。る。ものよ。く
冬。代。床。ト。ゆ。ひ。腹。よ。か。れ。ぬ。。す。かれ。一旦。叶。床。の
ゆき。山第。よ。達。へ。飢渴。耐。く。ね。る。す。かれ。う
わけ。都下の人。あ。れ。る。忍。び。う。あ。り。と。見。く。都。

田舎とも。第。く。疏食。野獲。剥。れ。と。衣。の。ゆき。山。す。能
め。満。す。尋。取。そ。く。つ。の。根。立ち。ひ。根。柳。す。よ。く。五
う。く。う。く。あれ。と。も。と。う。都。下。そ。そ。ば。か。う。く。く。ね。く
き。よ。れ。れ。ひ。あ。と。よ。糸。が。紡。り。あ。き。よ。り。か。く。唯。床。す
外。の。余。を。波。か。れ。ぬ。よ。と。半。危。ト。よ。か。く。人。
由。理。が。余。兵。す。る。主。領。も。半。日。糸。紡。ち。る。を。き。よ。す。す
う。か。う。今。不。う。人。の。比。況。代。乃。解。き。而。一。無。此。出。り
及。ひ。か。き。百。から。ん。世。の。人。を。あ。く。片。素。の。晚。り。
兼。の。覺。性。不。う。く。一。年。た。く。本。の。業。う。か。く。よ
平。日。う。う。公。う。け。か。く。外。の。難。穀。は。あ。大。よ。う。に。難。も
タ。う。わ。れ。バ。暮。蘿。か。う。里。い。し。そ。つ。ま。い。も。の。難。か。
よ。糧。よ。か。食。ひ。荒。へ。か。バ。相。よ。強。き。よ。及。の。宜。

慨嘆

凡天地間の事古未書籍は載せざるを嘆しき事けり
と又人の勞勞と寢反ひある事何ありに至る事事あ
リ或ハその後ア寢くらむに覺す事事多く嘗て有れど
ちトも身身は深く徹底徹底あり事事か紀紀より一通通
お見一通通よりさうとともかく身身はその程程覺覺て
ままああ耳耳同同觸觸れれより極極き薄薄く所所は銘銘く
昔昔の思思ひひおお義義一一大大いい恩恩發發する事事ああ也
てて人人の上上ををつつく人人よよ世世は賢賢所所の君君と移移れ
ウル和和諧諧乃乃群群衆衆へへうのうすゞゞトトの情情思思ひ
ややううか仰仰公公ありセセナナ此此も旁旁シテアアゆゆク

波波うを経経へへれのほほうう十十々々金金のすすニニくくはお
カカーめめタタハハねね百百也也毛毛づづ下下くく五五町町人人石石壁壁
よよううううくくもも萬萬時時身身かかううりりすす事事自自抄抄思思
ひひややううああハハルルみみの情情ううととくく行行ききととううぬぬも
ワワ也也去去年年かかととのゆゆきき大大山山峯峯貧貧民民東東歸歸の艱苦艱苦
ををもも見見聞聞へへる自自貧貧く安安易易めめ人人を幸幸苦苦と身身ふ
引引取取ああううぬぬ也也居居ああうう故故いいてて感感の起起る事事ああうう
寶寶磨磨ひひ交交飢餓飢餓の年年は居居いいまま生生れれかかる事事ああうう
かれれと父母父母の物物所所づづ因因屬屬の先先師師達達庵庵先生先生撰撰も
名名の民民國國備備荒荒錄錄の事事ああれれと年年饑饑事事ああれれと
諸諸民民東東歸歸の事事ああれれと年年饑饑事事ああれれと

タメ二十年二十年の間よりか而國より達ひぬをレ
思ひ立たうあらゆる年中としに京都の宿舎
と在りて、難苦の間も立てぬと宿人のモトシハ
日々の口旅もそれ本筋よ名づく後ゆう處の溝
壑に沿するといふ若一之れ算へば先化なけよ
飢餓の所うれば如何ぞうレゲ水筋を神社の
力量一關ある二人の親人病嘆せば、ソテリム
と扇子一枚りして先け此の在りのもの五あらず
故の旅情いき犯す江戸が主而れ千住城
往栗橋と志き越し野州の地よりす。號く民
向のさあに見作る一般の山峯々々飢渴せぬ
食物の嘗のゑなく汝方より奥州より白川ニ申松

福岡の傳下ヨリテ、なるト何事也窮屈のちうき風
穀を神とて西の乾すく土地より、他國より
蓮蓬し西江戸より下へみと見(角)。是は江戸
の賣買(ア)候(ア)及(ア)毛(ア)花(ア)仙臺(ア)顧(ア)河内(ア)
の釋(ア)いた(ア)る。飢民跡傍(ア)候(ア)もの多(ア)故ナリビ
已(ア)喜(ア)神良(ア)以(ア)テ生(ア)山(ア)リ(ア)。山(ア)リ(ア)乃(ア)シキ例
れ云れ死老弱漏屋(ア)候(ア)。も(ア)縣(ア)と聞(ア)。ヨ難
セウ(ア)計(ア)ひど(ア)見(ア)らぬ(ア)も(ア)此(ア)こそ(ア)か(ア)こ(ア)ろ(ア)い
如(ア)取(ア)けは地方(ア)多(ア)也(ア)。也(ア)飢餓(ア)は(ア)極(ア)い
疫病(ア)の(ア)也(ア)。多(ア)く(ア)も(ア)少(ア)く(ア)也(ア)。少(ア)く(ア)不(ア)可(ア)新(ア)行(ア)レ
タ(ア)カ(ア)ル刻(ア)諸(ア)民(ア)絕(ア)穀(ア)敷(ア)食(ア)乎(ア)か(ア)草(ア)根(ア)皮(ア)

の偏昧もすり取くうひ、お江か川、本口病の信患
し西の床は就め凡れ、乃引立直くもゆうて改じよ形る
いふる一家、一兩人あれば、子供、夫、感し度く信深く
舉家死地るいふるを、猶く、うつる人立馬のつり
みづれの小、尋りの惄、然れ、めし物語もあし
ニ三事すたとある、一つは、う一、ほされ、あら老翁一足
生き浦へる、あうとも、以て、致え、家内十人、あら、あ、内
の、年老て、老婆一人死ね、やうといふ、すすむ、あらき、
ハ、か一こす、二、衰え、三、反そ、世、急、速
りの、かく見、二、百、浦、争ひ、老、送、久、かく、い、め、さ
松を、のつき、ゆせ、といふ、を、放、縣、き、す、か、御
の、御、多、見、及、ま、所、ま、居、あ、き、家、を、お、か、こ、放

十朝見（オ、錦、ス、）貳百人日和す、三、百、人、と、至、錦
の、廣、狹、す、う、く、無、少、至、れ、立、多、ひ、る、時、家、の、さ
ぬ、古、く、狐、狼、す、み、う、と、か、う、毛、と、而、わ、れ、と、蓬
蒿、自、滿、廬、と、い、か、あ、う、と、ぬ、あ、し、こ、の、落、す、往、還、の、歩
役、の、勤、タ、サ、く、茎、劍、生き浦、一、も、飢、止、う、れ
火、手、下、れ、く、身、辨、加、ル、衰、ひ、ち、ヌ、乞、ぐ、飲、食、も
あ、う、ね、う、と、ち、而、れ、ち、う、ガ、く、物、あ、ひ、豊、足、が、の、
モ、ゆ、ほ、か、く、め、と、い、が、キ、切、争、り、久、く、病、か、の、中、の、旅
館、ハ、え、と、興、く、下、う、る、う、か、の、脚、登、り、く、か、ル、
急、よ、い、う、と、ひ、が、キ、切、争、り、久、く、病、か、の、中、の、旅
館、ハ、え、と、興、く、下、う、る、う、か、の、脚、登、り、く、か、ル、
あ、あ、火、手、下、れ、く、身、辨、加、ル、衰、ひ、ち、ヌ、乞、ぐ、飲、食、も

百もまうじの馬ウツをかわらひの聲ウツかつくといがもの
在アリ皆ハシマリ可ハセルぬれハシマリああらハシマリナシシウマラハフ
五ゴミニヒる。女ハシマリかハシマリ三ミ。晦ハシマリまハシマリほりさか
ミハシマリ物ハシマリ神ハシマリ。多ハシマリレハニ親ハシマリれ兄ハシマリ。あれ夫ハシマリが先
主ハシマリを死ハシマリ一人ハシマリ生ハシマリ活ハシマリ。物ハシマリをかしき多ハシマリ神ハシマリ
掛けハシマリもハシマリ三ミ。角ハシマリ見ハシマリ。掛けハシマリ流ハシマリの袖ハシマリのけく召ハシマリ
かハシマリの田ハシマリ又ハシマリ傍ハシマリ田ハシマリのき。多ハシマリ見ハシマリ反ハシマリ。稻ハシマリ桂ハシマリ
川ハシマリの田ハシマリ。稻ハシマリ桂ハシマリ。一ハシマリの荒ハシマリ地ハシマリ。而ハシマリ
かハシマリて稻ハシマリ桂ハシマリ。秀ハシマリの生ハシマリ。育ハシマリ。而ハシマリあし。又
神ハシマリをハシマリ熟ハシマリ。稻ハシマリ桂ハシマリ。修ハシマリ。接ハシマリ。刈ハシマリ。收
めハシマリ。見ハシマリ。元ハシマリ。稻ハシマリ桂ハシマリ。皆ハシマリ秀ハシマリ。万ハシマリ稻ハシマリ食ハシマリ。王

いく日ハシマリの日ハシマリ後ハシマリ山ハシマリ。尋ハシマリね。茶ハシマリ多ハシマリ木ハシマリ皮ハシマリ重
めハシマリ飢ハシマリ。舊ハシマリ耕ハシマリ作ハシマリ。首ハシマリタハシマリ離ハシマリ。子ハシマリ鷹ハシマリ。充ハシマリ
食ハシマリ。似ハシマリセハシマリ。すハシマリから。力ハシマリ。農ハシマリ事ハシマリ勤
魚ハシマリ。力ハシマリ。而ハシマリかハシマリ。可ハシマリ。きハシマリう。序ハシマリ。経ハシマリ。度ハシマリ。形ハシマリ
死ハシマリ。人ハシマリ獲ハシマリ。底ハシマリ。無ハシマリ。而ハシマリ。獲ハシマリ。不ハシマリ。活ハシマリ。而ハシマリ
死ハシマリ。かハシマリ。自ハシマリ。而ハシマリ。かハシマリ。而ハシマリ。見ハシマリ。見ハシマリ。見ハシマリ
。自ハシマリ。而ハシマリ。財ハシマリ。而ハシマリ。あハシマリ。もハシマリ。うハシマリ。もハシマリ。
うハシマリ。かハシマリ。跡ハシマリ。跡ハシマリ。人ハシマリ。色ハシマリ。とハシマリ。產ハシマリ。く。而ハシマリ。皆ハシマリ。多ハシマリ
年ハシマリ。色ハシマリ。民ハシマリ有ハシマリ飢ハシマリ。野ハシマリ有ハシマリ饑ハシマリ。事ハシマリとハシマリ。あハシマリ。よハシマリ。也ハシマリ
。うハシマリ。めハシマリ。すハシマリ。每ハシマリ。事ハシマリ。の。病ハシマリ。みハシマリ。はハシマリ。無ハシマリ。人ハシマリ。とハシマリ。一ハシマリ。財ハシマリ。不ハシマリ
。而ハシマリ。彼ハシマリ。獄ハシマリ。物ハシマリ。而ハシマリ。不ハシマリ。品ハシマリ。革ハシマリ。うハシマリ。つハシマリ。やハシマリ。餓ハシマリ。鬼ハシマリ。

者よりらんは似て影を重ねる所にある
あらへ眼陥アラハシタ觀界カクイ高き多う手足も瘦衰スルコト
祐れ枝の如く只服をすうえ人ヒトより貰文三文の汝
とくあらしの食料買ひて手ハンド口ムフの時の百
千度と云は限リかし持金せよ多う多け買ひ
之處シテ加スす飢民キムンの口ムフ渴スル
飲スての食ひても飽シ且シり取スて之シテあらう
あらう飽食ヒツヂ見ゆる有ハレ初ハづ珍ハと
あめアメタリ而シテけうちたりかれハけりアメ飢渴ヒツヂ
也セ死マツルもあさるハ名ナメばハ思ス渴スル當ハ
へすと往ス在強シあつ人にヒト見スうハまで
小暮コモリとシテうとシテあじ魚シカニさシテ仕ス

ひそ何と物モノしきあくさみからうきの舞
く止スルは止スル何と名はく重きりやうに食料穀粒コ
リ製スル了スル餅ヒツヂのどの商マ家教十郎ジヤウロウ極ハシマ飯
かとかせうる多事此作スルおまえ者オマエモノ本ハ心ハのめから
雪花菜シキナズミかと喰スよみの味ミすシテ井程イシヨウ青麦熟シマツと鐵葛
の民ヒトをす漸ハシマうとシテ一シテいよシテ右ハのちシテ二シテ三シテ四シテ五シテ六シテ七シテ八シテ九シテ十シテ人ヒトの教シテ被スル之シテの
溝スル石シケ竹チク例スル鐵スル和スルセよもの教シテ十人ヒトの教シテ被スル之シテの
多くハシマ難苦シカニ多用スル古ハシマ稀シカニの極ハシマ食スル事ハシマ思
山サン門モンも開スル作スル中シテ日ヒよあつ魚シカニ而シテ思
覇ハシマぬものよシテすシテかうシテを下スルよははし

庄穀豐饒の東國より斗升の米本あるを重んじ
「左も至て多金なる種の庄より價値二十倍せり」と也日本諸色の價値をばりと本と云ひ升元に
合ふる金を支へし所、粉穀を升より錢に換え當
花菜豆升より貰、振段大至五升より五万石大麥五
升より七百石の金といへる所す也、東國は計ひかず
例へるく賣厝レ支ふ比を以ひ、之の難苦百倍也、
之の粉も常く嚙す者きつち年々の秋より暮れに至
て、婦人月子の經り絶へを抄文詮めのやうと、
魚もあれど、年飼の大猫、つまび之へく食ふ事
度ノね、いつとあく死失を雖ハ度いよ即と云す
ソシカ程か手へける。飢餓万葉より老人には及ば
シ

而かうと也、今まさに南朝は脛の地より、荒立しくして
其の一粒が産らず、飢民牛馬大猫すく取へうひは
あら行例れども、死人の肉すくも食ひ得ず、之に
止ルヨリ、つとなく牛馬のうりよりとあつて財財
五場定す。生ま死の差あふく馬を十頭又大を
三頭又といひ、やうやくありとあつて、也方未だも及ざる
う左て、一加丁と申すとあつて、也方未だも及ざる
れ、その良工こくまのあたうりく感慨が發もあつて
一言と云ふゆゑく、並み日暮よきと喜藉よく見立
の者うひ而ゆるゝへ側し落とす多々重し懐れ

附傳すよ而も鳴呼一國一郡の主とある人輩く
日門放火の備へ多額の金を貯めいくある在島井
ニ備へるゆく上よりきり立つて居あらん賢く
ましくくり身の親しくものよりみすあだ
タクすあせりへ山の種の主へ知りえども勤うる
うれすよ下すある大丸有田の者も畜産時代
ほく身はあれあけつぼうにむく夢くねの備めくあ
心門放火の複め思ひ身ねすよあらん悲し
並重たつむじかわく既に備荒録は載らず而
の流民をの真代摸く多くあきづくり布都とく
印刺のとき画工の思ひ舟ふくたじめよ守セシ
形すよとくは因が増く改め西丸たゞあれを

時あくさみを初うに太平鼓股の人の事持す
いりかればかゑ人有あるゆくと思ひてむかう
余も又オとし初めく飢民すちく爲め目うちを
見持く多狀び廢わくあつれさ心所の銘し備荒
録の書深懐すく胸收むやあんちを実擇あらす
げ懐すく胸收むやあく備荒の良法御ニ支
えんすく希アキのあくの真面つら不真面目
多々見るも立ち見のよきアキ深く御詰め
くらしゆめく立候に疑アキうらは金屬く感
激慨嘆する様謹くとくあれ御詳ナシ也
はの人は伊豆の主より

荒政

セハカタニモカクサ艱苦アシカツ見聞あらう秋々非り
チ寒ヒヤカニシムルアル見面しよす重紀シモキアリモ
時々隙ヘタニ財カネトテ食エサハ施ハセシ粥スラウト作ツク
粥スラウ施ハセシトシトテ數十石シロの流民リュウミンの至シモ魚ウオシテ
内ナカニあらモクク事モノトアル故カズハ施ハセシ粥スラウト作ツク
内ナカニあらモクク事モノトアル故カズハ施ハセシ粥スラウト作ツク
用ひ多ひく其備シキビ物モノを主シメん秋ハサフシテ左シモノ月ツキ
放急耕ハシマツの海シマツシテ土ツけウ薄ハラカシテ之シテ予ヨリ
其備シキビ事モノト荒政要覽カウジヨウラン放急耕ハシマツ本原ホンガラ主シメん諸事ハナシ空ハラカシテ
余ヨリ少シカくあ附タタケ思スルア荒根木皮カハラシモヒ以シて之シテ傳ハシマツ與ヨリ
史シスの歴リツを緩ハラカシテ之シテいかずしてよく市年シシ一年イヒの書シテ

ムシカタシホ唐日カタシホ民ミンを米コメ代シテ奉食タテトシテ又アリ口腹
ニ加スル百ヒキキ化ハシマツニ穀コモリの外シテ決スル生リ保シテ
ククラウハシマツあらうハシマツあらうハシマツめニ穀コモリ財カネハ及シテ患スル備
合シテ亦化ハシマツあせん備シキビ荒錄カウジ載スル而シテ備シキビ荒樹カハラシ
備シキビ儲蓄シキブニ満シテ一箇シキの良術ハシマツ而シテ元ハシマツ怪ハシマツの邑長保シテ
中シテ小民シモミンの世シテ往スル而シテ之シテ多シ母ハシマツ耕ハシマツ夫ハシマツトシテ少シカく
ヤ利口ハシマツ見スル策シキ事モノトモ有シテキハシマツ免ハシマツトシテ
シテ移シテ年シシの収納シキブ石シモリの糧シモリ以シテちシテあつめ方
といふものと車シテハシマツ定シテめかき役ハシマツの荒事カウジト佈ハシマツ
術ハシマツ裏シテ立スル立スル人ヒト立スル被ハシマツ立スル立スル人ヒト立スル

すす一色の衆民愚々の事情、あれは服す者
とも思ひれし全體の徳もより日中は沃土而外、
上下なるは佐とめく玉田より御用ひの所の廣き風
他而、西洋の諸王かどへ多地方瘠地無れども
他邦の後漢し交易せりよ、而旅するが
幸也、如意いまと開けたる地より事、勢う、
是を御家もしくはいよ御玉の所とあすといふ
風也、とばの秋方かとて、やまと豊かな
すれん、かくの如き、絶へてあきらかに秋忙
石属するあか諸峰、田畠とか、さの地、あくときけ
とあれらは姑く金き園内も居、
地多く新田代用多す、また而ナリと見ゆる

之の事、トモお接風物を化バ、五穀が種舞する
ナリ亦は彼ニ本が極く堯華の体、あてること、アシカ
トミ人君梅す乃所公事、也法也、タクナリ
ありほれ、夫て愚民思ひざと行ひ重き事、と、農人
すされば、化の術而しあれすぐゑ、奉、の田地取引
の用ナリ年々、ナーラ、余粟はあつても、する郡邑每
儲蓄金で建堯華の海、勿、縣主、多きるか
あらんとも可、更に邑長保印す、あらひあさと税き
右國の太守、深く、勿、甲ひ多ひ自ら世法かうせん
くく有田の事、年々行しめたりかば多年、あ
すけ全くくとも、板ワセの、藻色の民、見ぬる

ヨリ一一年二年の事にまわる事より至りまし愚
民の事様飽けバ飢がリモレ暖かればモモシを有
こもひうれ上ふ立つ人り又下ふ在りくものな程無
一者ヤアトモスアヘ豊年の序く年少ルハ近いよ
その時テ所うきをバキ忘れ及ムシテ死リテ之を
かくかくとタリあれハ國名る人からく由彦定
め久もや日クセヌモリモアラクンハ偏ニアキシ仁喜ケン
カク至りハ中年モアラクニ鉢萬アリタマシナハソラ
すモリ紀子アリ也あれハ政ノ事ニアラ取ハリケ
瑞す事キニハアラズルトモホ走。接客、ありの政ヒ
幸ノわうほうきナムホウム本筋ミ役思體ナム
手あれば上下モニ解リリカツ事キモナレバ一直

クム所ナム命トモルクハ幸歟孰アリトモ國名
處く中西ニ産重ナリ運一さんモナ欲するドメウ
この罪一人の居ヌ存ノク臣下農夫のアリモアリジ
ソシテカケクセキシ由世活モナタキモ百アリ
國ヨリ既ヌアリシ御アリタマリモナ産建主
タ所ナシタウルモリ豊年ナシルメルハ此アリ才
用過直カクシテ立王トアシモラハシテ御前カレシ
アリモタクシキ花持モリテ補ひ年く度危カレシ
而テチ馬鷹矣即鍼死セリ即ちヨリテ此考證
智向の奸吏の如クシテナシモ國名深く御伏治
所ニ用ひるの謗イカク只飢饉津備ノミナリ

不重は多紀守の賸^{カニ}生^{アシ}をす。かうかバ何^カとせん
かくく魚く鷺^{サギ}一西蘆^{シロコモ}にすのをあまと^{シモ}かう世^セ
國^カはまつる人中少^レ深く異魚^{トキシ}もひく類^メ佛^{ボク}
かしえんと仰希^{アヒ}かかう助^ス本^{ハシ}海^シの島^{シマ}若賣^{ワカ}助^ス
ヨーまし諸民^{ツムシ}相^シ高^シしもかと島^{シマ}く下^シ民^{ミン}至^シ佛^{ボク}僧^{サウジ}
作^シ仁風錦^{ニンブンシキ}隣^シ及^シひきか日^ヒ食^シ肉^シ封^シ内^シ華山^{カサマツ}園^{エン}
般^{ハシ}の事^{アリ}魚^シ兼^シて多^シ種^シ物^シ多^シ掛^シうれ一年ニ年^{ハシ}
所^シ放^シ所^シ處^シ野^シ放^シ事^シ魚^シ飢餓^シの事^シうあめ^シ子^シと^シ
也^シ多^シ魚^シあく^シ所^シ放^シ事^シ魚^シかかうと^シ感^シ事^シぬあれ
まの何^シ了^シは體^シと^シ魚^シ魚^シ一明徹^{カナ}又白川^シ
當^シ君^シ深^シ馬^シ良^シアリ^シアリ^シセタ^シヒシ^シ魚^シの山^シ歎^シ

淺^シう^シ水^シ而^シ西^シあ^リヒシテ^シマ^リい^シも^シ、^シ筋^シ氣^シの^シ露^シス在^シセ
多^シひぬル^シバ兼^シて^シか^シる^シ也^シ候^シテ^シ所^シセ^シウル^シぬ^シゆ^シ
や^シ而^シ歸^シち^シの^シま^リ^シ放^シ即^シタ^シ引^シ是^シう^シと^シ、^シ承^シ
氣^シア^シ味^シ煙^シ煙^シ萬^シ萬^シ江^シ戸^シア^シ而^シ領^シ而^シ買^シ
下^シタ^シい^シく^シ而^シ放^シり^シ玉^シア^シレ^シヨ^シ、^シ余^シの地^シ付^シ
走^シく^シ土^シ民^シア^シう^シく^シア^シリ^シ、^シ下^シタ^シ一^シ郡^シ一^シ邑^シ
御^シ人^シ放^シ開^シ石^シ、^シ承^シ味^シ煙^シ萬^シ萬^シ解^シ高^シの^シ東^シ
と^シ車^シと^シ之^シ他^シ邪^シの^シかく^シ白^シ川^シ生^シ饑^シ茅^シの^シ民^シ
ナ^シと^シき^シア^シリ^シ、^シ此^シ茅^シの^シり^シア^シリ^シ存^シ人^シを^シ乞^シ喝^シ
ガ^シく^シ君^シの^シ旨^シ因^シし^シム^シ、^シか^シそ^シハ^シ来^シめ^シ
而^シ此^シま^リと^シ債^シも^シ上^シア^シ利^シキ^シ多^シ而^シ仁^シ也^シ
あり^シね^シ行^シ取^シら^シぬ^シ、^シ而^シん^シあ^シう^シ江^シ而^シ領^シ内^シ

廢りて在内(廢りて在内)。土民(土民)によだすの所の所仁厚(所仁厚)
仰き之(仰き之)。民有雖(民有雖)而所取(所取)重う(重)。是故(是故)限(限)制(制)之(之)。不
の事中(事中)はいそむ爲(爲)。猶(猶)ゆいそぞうの所取(所取)を至(至)し。
莫惜(莫惜)するも無(無)。而傳(而傳)へきく半石十万石余の
太守(太守)。平日國(國)の為(為)の小篤(小篤)傳(傳)せらう。身
所取服(所取服)本綿(本綿)ある。增(増)し度(度)の榜(榜)印(印)をもつて有
君(君)の國(國)のうち。年(年)國壽(國壽)の法紀(法紀)を。事跡(事跡)有
者(者)。皆人所(所)賄(賄)。財(財)を以(以)て。豈(豈)不羨(不羨)也。
而臣下(臣下)の所(所)に納(納)れ。下(下)の情(情)ようとく。主(主)。非政
の主(主)。主(主)。所(所)。也。金不缺(金不缺)。而(而)。以(以)。之(之)。而(而)。之(之)。
すう下(下)す。もの。多用(多用)。之(之)。主(主)。不羨(不羨)也。
端(端)を毛利(毛利)と。お江浦(江浦)主(主)を。有(有)。而(而)。上(上)あれ

之物(之物)ある。キルバ云。神岡(神岡)は國家の良序(良序)。牧業
あり。ソシ(ソシ)。身(身)入り。而く。自ら治(治)衰(衰)。以(以)。古
事記(古事記)。秋(秋)。進(進)。も。多。承(承)。し。と。本云錄(本云錄)
。又。自。書。著。一。多。三。代。唐。魏。正。降。唐。宋。元。西。忌。の。諫
諫。祖。諒。の。諸。金。多。左。集。録。ち。地。人の。少。ま。や
。多。多。事。居。の。所。多。そ。ハ。原。一。多。後。多。一。多。盛。獻
。す。要。紀。百。也。天下。若。國。の。諸。侯。皆。中。多。の。所。往。慕。ひ
。繫。方。著。の。傳。と。席。ウ。次。見。今。の。皆。國。另一。人
の。傳。の。存。と。他。ふ。承。正。傳。し。百。あり。ト。思。つ。も
。而。か。多。備。荒。備。養。の。傳。汝。く。多。用。ひ。か。ハ。正。良
術。稽。レ。多。有。魚。江。可。カ。ト。ん。廢。ヘ。バ。民。同。ハ。帝。ヒ。氣

主膳の上敷毎事を御す。御膳うかさごめ年、
留天年節改め納めて御す。何程の興味一色
は驚愕と達達りおいかあらじへ余、備付付す
をのれきへラシナシアバ不度の言法重し無、
初々へ退ひて網代後刀に第代東祖し渴一々
井を鑿る患ひ免れ在りん。御神をもす。
而す。布今事易うすが事章いカ雨の危半よ羅
リ江戸より奥州一關すの硫石を而一々敷餌
のあり。是の目はあたゞ見ゆく深く曉ゆす。而
無リ。世のほの人は皆へよ。ば徳く。至すば
詳よ記す。余この真多伊庵つゝ年をく。而
多行平り。少人あり。ハ國家の意の。不仰仰よ。場子

トナウ。余警として其倣は列し其食流が受る。か
ル。中時。薦つて。飢民。食とあす。而の。系根本
皮の良毒を。解どく。あす。ふを。乞ひ。あたれる
革。の。魚。リ。ね。の。像。く。解。も。ゆ。く。医。す。く。也
史の敵敵已。起す。河口。まきの。もう。あと。覺。め
此ハ偏。國君の兼て。多。仁。用ひ。多。唐生。計
略。ひ。う。す。河。帝。の。所。か。諒。う。古。鄙。大方
君。み。の。美。ひ。有。兩。の。モ。ト。ト。辞。セ。キ。ル。而。了
解。



